

私たちは別の五億円世界 第12版

2018/8/28 山本健介 1稿

登場人物

まひる (子供を亡くした女)

ツルハシ (まひるの旦那)

小池 (まひるの恋人)

外部人 (「誰でも、彼でも、そこに居ていい人の家」の外部の人)

ニホエヨ (小池の新しい恋人になる予定の人)

モグラ (博学なモグラ)

水鳥達、小リス、食卓塩、車 (しゃべる者たち。全員薄汚れている。)

IT人 (IT人いる必要はない)

IT人の透明社員たち (「お金」という言葉を「私」と口にしてしている物)

場所と時間

まだ人々が生きていたころの世界。

私たちが生活している世界とは異なり、まだ人々は死んでいない。だが、この世界の人々は、死んだあとしゃべったりすることができないため、死後自分の感覚や思考を生きている人に伝えることができない点が私たちの世界と異なっている。

おそらくは二〇一一年からやや少しあと。Twitterはあるが、ラインはまだない。

海辺にみえるが、川が巨大すぎるため海に見える。

舞台奥は川となっていて下手から上手に緩やかな流れがある。大掛かりな装置が横切る。

舞台奥、向こう側に蜃気楼のように別の大陸が見え、それはもしかすると私たちの今住んでいる世界のようにも見える (映像のようにそこは絶えず見え方が変化している)。

また、そこもアクティングエリアであり、観客席からは遠いため俳優が小さく見える。

観客が観客席(それがあるかどうかは分からないが)に入る遙か前から、まひるは舞台上に居て、川の方を見ながら、読書している。

木の椅子が一脚、上手に。簡易的な机もあり、そこには筆記具とノートがある。

上手には通路があり、それは劇場(かどうかは分からないが、ある空間)から外までその通路は伸びていて、いなくなることができる。

下手には下手に伸びる螺旋階段があり、天に伸びている。

川のように見えている部分は渡ることができる。そのまま奥に行くことができるが、奥の別大陸の部分にはたどり着くことはできない様になっていて、途中でハケられる仕組み(奈落?)になっている。また、舞台のどこかに地下世界がある。

開演前

下手から、さまざまなものぐゆっくりと流れてくる。川は大水で、大きなものも流れている。看板などが流れていて、その文字には「携帯電話をお切りください」「時間は一時間半（上演時間の事を指している）」「飲食喫煙はお断り（劇場・会場のルールが書かれた看板）」などが、ゆっくり流れている。

開演時間

流された大きな物たちが小康状態となり、川には何も流れてこない。水はよどんでいるのか、底が見えない。

外部人、「という目の不自由な人がまひるの元にやってくる。」

外部人「お待たせして申し訳ないです」

まひる「え？」

外部人「私です。あの、お部屋の……」

まひる「ああ。もういいんですか」

外部人「いや、あの、あまりお待たせするのは……。あの、こんなところでお待たせするのは、すごく申し訳なくて」

まひる「あれ、私、どこで待てばよかったです？」

外部人「あー……喫茶店？ とかですかね」

まひる「喫茶店で、お茶とか、コーヒー飲まなきゃいけないじゃない」

外部人「そうですね」

まひる「本来の目的は、そういう場所でしょう……。コーヒー飲むための場所。コーヒー、飲めないんですよ。黒いじゃないですか。黒い飲み物って……。飲み物としておかしくないですか」

外部人「わかります。」

まひる「え、じゃあ私、どこで待てばよかったですかね。待つって、歩いたり、移動とかしたら、それ、待つってことになるのかしら」

外部人「ああ時間稼ぎみたいに……」

まひる「ね。待たせている人がいるのにね、なんか暇つぶしみたいな事したら、なんか申し訳なくて。」

外部人「いやでも、まあ、喫茶店……とかで待つっていても、いいと思うんですけど。」

まひる「喫茶店の、喫茶店側の気持ちになってもね、喫茶店の、本来の目的でないのに、そういう使われ方をするって……それはすごく、喫茶店の……邪魔しているみたいで、つらいんです」

外部人「ああでもあの、目的、あの目的といいますけどね。本来目的って。目的って変わ

ますからね」

まひる「ええ。お金もかかりますしね。コーヒー一杯、680円」

間。

外部人「……明日ですね。五億円の」

間。まひるは聞いていなかったのか。

外部人「別に、喫茶店にいてもよかったと思うんですけどね……。こんな、外で待ってたら……変な風に思われるじゃないですか」

まひる「みられたりするからですか」

外部人「そうです……そうです」

まひる「大丈夫ですよ。……誰も居ませんよ」

外部人「そうですか？」

間。ツルハシが来ているが、外部人は気がつかない。

まひる「あの」

外部人「ええ。あの、まだ部屋の片づけ、全然……誰も私以外、手伝ったりする人がいないんで、だから、まだ、受け入れ態勢っていうか、空いてないんですが」

まひる「まだって事ですか」

外部人「ええ」

まひる「じゃあなんで来たんですか」

外部人「あ……まひるさん、外で、待ってるから……。喫茶店とかで、待てばいいのに」

まひる「わたしがやりましょうか。お片付け」

外部人「いえ！ いえ！ いえ……それは、いいんで。まだ、それは、いいんで。まひるさんは、お客さん……客じゃないな……。でも、そういうけじめは、ちゃんとしたいんです。

こっちはちゃんと提供して……提供する側なんです」

まひる「じゃあ、もう少し待つ、って感じですかね」

外部人「もうしわけないです」

まひる「申し訳ない、っていうのを、わざわざ伝えに来てくれたんですね」

外部人「ええ」

まひる「ありがとう」

外部人「ええ……」

外部人、まだいる。ツルハシ、話しかける。

外部人とツルハシは交わらない。まひるの中で、二人との会話の過去と現在が同時に行われている。

外部人「明日……」

まひる「……ああ……。なんですか。」

ツルハシ「明日なんだけどね」

外部人「……いや、みんな、どうしたらいいかなって思ってるんです」

ツルハシ「やることのリスト、作つといたから。」

まひる「ありがとう／お金が振り込まれるのを待てばいいんじゃないですか」

外部人「まひるさんくらいじゃないですかね。普通の顔をしているのは」

人の形をした何者かが川を流れてくる。俳優が演じている。まひるは敏感に気付く。

人の形をした物「明日なんですけど、全世界の人々全員が私をもらえることになりました。正確に言えば日本円ではないのだけど、ほぼ五億円の評価の私が、各個人の口座に振り込まれることとなっています。」

外部人「どうかしましたか」

ツルハシ「明日、たぶんいろんなことが起こるだろうから、僕が居なくても、できるように

準備しないとイケない。」

まひる「あ、いやあの、聴こえちゃう奴です」

外部人「ああー」

まひる「すみませんこんな時に」

ツルハシ「ああ、大変だな」

まひる「もう慣れちゃって」

外部人「いや、それは、慣れとかの問題じゃないです。ハッキリと、からだの問題です。から、謝るとかしないでください。謝るのダメです。」

ツルハシ「ちゃんと休んでても、そうなっちゃうんだな」

外部人「脳のエラーですよ……だから、私たちの家に来て、部屋に入って、ゆっくりと時間をすごして、ちゃんと休みましょう」

まひる「ちよつと静かにしてもらっていいですか」

人の形をした物「それで、今はまだ昨日なのだけれど、その振り込まれる明日にむけて皆は準備をしていた。準備といっても、預金口座を新たに作り、その口座を何らかの手段で私に伝えます。すると、明日、一人一人五億円の私を、振り込むこととなる。」

まひる「振り込まれるのはわたし？」

時間が飛んだようで、ツルハシが外部人と入れ替わりにいる

ツルハシ「まひる」

まひる「ツルハシさん」

ツルハシ「今日、むこうの家に行くんじゃないのか」

まひる「待って」

人の形をした物「それで、その「明日」というのも、ちょっと時間間隔が私にはよくわかってないのであれだが、正確に言えばもうあと数時間後みたいところがあり、私が振り込まれる時がきたら、私たちはいったいどうなるのか結構見当もつかない。」

まひる「待って、私って誰」

ツルハシ「まひる」

まひる「ちよっと黙ってて」

人の形をしたもの「例えば心配しているのは、誰も働かなくなるんじゃないかとか。たしかに昨日までは、まだ「実際には私は振り込まれるかわからないから働いておこう」という人達がいるせいか、目立った混乱は起きていなかった気がする。とはいえ細部では本当はいろいろともう、起きていたのだが——」

まひるは、流されていくものを見つめている。それは流されていく。

ツルハシ「……大丈夫そうだね」

まひる「うん。え、何が？」

ツルハシ「うん。大丈夫だ。まひるは大丈夫だ……大丈夫だ」

まひる「ちよっと何が大丈夫なんだろう……。怖いんだけど」

ツルハシ「ん、俺は今、怖がらせている？」

まひる「いやそういう訳じゃなくて」

ツルハシ「いやでも、そうだな。そういうのって俺の責任だな。俺の責任だ。申し訳ない。

……一応、明日やる事のリストを作ったから」

まひる「ありがとう……あれ、これ、昨日貰わなかったっけ」

ツルハシ「昨日というか、ここのところ毎日作って、渡しているよ」

まひる「あれ……そうだったっけ……」

ツルハシ「あれか、怖がらせてしまうから、忘れてしまうのか」

まひる「……」

ツルハシ「それも俺のせいだなあ……」

間

ツルハシ「ここにくるのにね、ちょっとかかってしまっただけ。ガソリンがね……買い占められてしまった。買い占められたというか、もともと持っていた人がそうなのか。ともかく、車がね、もうガソリンを持つてる人しか運転できなくて。タクシーもほとんどない。まひるも、移動する時、気を付けた方がいい」

まひる「車に乗れなかったの？」

ツルハシ「ようやく、乗せてもらったんだよ。頼み込んで。真剣に頼んでね。頭を下げて。

そしたら、方向が同じって人がいたから、なんとか、真剣に、頭を下げて、それでようやく、乗せてもらった」

まひる「……会社は、まだ行ってるの」

ツルハシ「行ってるよ」

まひる「あした、五億円もらえるの？」

ツルハシ「うん」

まひる「働くんだね」

ツルハシ「私が働かないと、部下が……同志がついてこないだろう」

まひる「同志？」

ツルハシ「もう、給料が目的で働いているわけじゃないんだから、部下と上司とか、そういうのをやめて、同志って事にしようじゃないかって。そう決めたんだ」

まひるの彼氏の小池が出てくる。小池は車に乗ってやってきた。

ツルハシと小池は同じ時間軸に居ないが、同時に話は展開する。

小池「なんかガソリン、ぜんぜんなくなっちゃあ」

まひる「旦那もそういう事言ってたな」

ツルハシ「私はだから、乗せてもらった」

小池「旦那さんは？ 今日何してんの」

ツルハシ「働くよ」

まひる「働かって」

小池「ふーん」

ツルハシ「寝てないんだけどね」

まひる「旦那の職場でも、明日になれば五億円がもらえるってことになったら、退職する人が出始めたって。その穴埋めをするため、旦那はね、ツルハシさんはね、ここ数か月間、

休みなく職場に行つてね。人員の手配で苦心している。ずっと働いている。」
ツルハシ「ずっと寝ていない。」

小池「ふーん、大丈夫？」

まひる「旦那は過労死すると思った。」

小池「うん。助手席乗って」

まひる「うしろがいい」

小池「ん、後ろ、お芋積んでるからだめ」

まひる「お芋？」

小池、まひるをのせるが前に居るツルハシに気がつく。

後部座席から芋を一本取りだす。

小池「あ、ツルハシさん、お芋ですよ」

ツルハシ「お芋……生だな」

小池「サツマイモなんすよー。ベニアズマ言うらしいです」

ツルハシ「……これを、くれるの？」

小池「え、そうですけど？ え？」

ツルハシ「あ、うん。……まひる、生の芋、もらっちゃったぞ」

まひる「芋？ ……どうして？」

小池「うんなんか車、ここにくるまでに、もう車動かせなくて、みんななんか明日五億円も
らえるからって、どう関係しているのかよくわかんないですけどガソリンスタンド、人い
なくてももう全部やってなくて、じゃ歩こうかなって思っ

ツルハシ「ん？ 芋の話？」

まひる「え、ここまで歩いてきたんだ。え？」

小池「うん。いや、車に乗ってきたんだけど、今、これ(車)は過去ね。昔ほら、袋田の滝
にいったじゃん。その時は車に乗ってたから、車、乗ってんだけど、今は、ここまで歩い
てきたのね」

ツルハシ「ちよつとよくわからないなあ」

小池「いやいやいや結構今、歩いてる人多いよ。震災の時の帰宅困難者を思い出すね。あの時
僕は甲州街道沿いのコンビニでバイトしてたんだけど、コンビニで。ずっとみんな、暗い
道を列になって歩いてたんだよな。で、僕の店にトイレ借りに来たりして。コンビニの中
の商品、特に「電池とかないんですか？」「あーは、ないんですよー」「あーそうですか」
みたいな話何回もしてて、だんだんこのコンビニの存在意義トイレしかないんじゃないん
じやんみたいになって、まさに僕がただ居るのにふさわしい、びったりだなーここって思っ
たりして、でも店長責任感とかすごいから震災のショックで動けなくて泣いてたから僕
コンビニの外出て、甲州街道歩く人達に向かって呼びかけたもん。『トイレありまーす、

甲州街道、柘植花二丁目店にはトイレありまーす』って呼びかけて、そしたら店長、お前普段やる気のないのにこういう時だけやる気あるなって笑われて。店長その時精神が崩壊しているのに笑ってくれて、精神崩壊している人を笑わせる俺のお調子者っぷりってすごいんだなって急に客観的になっちゃって、それで、何でこんな話をしたのかというと、きょうはその逆の立場で、僕が外歩く人の役で、誰かがコンビニでトイレ貸す役になってるんだらうなって思いながらここまで歩いてきたんだよって話をしたくて、今してるんだけど。……そういうお話ね。」

まひる「それで、生の芋はどうしたの？」

小池「あ、生の芋、なんか『苦しいときはお互い様だから』って言ってこの辺の農家の人に貰ったの」

ツルハシ「ああ、そういう芋なのか」

ツルハシはようやく納得して生の芋を安心して触る。

小池「今、苦しいときなのかな」

まひる「苦しいよ」

小池「そう」

まひる「小池君、基本的に馬鹿だからいてくれるだけで心が安らぐ」

ツルハシ「いや小池さん馬鹿じゃないでしょ」

小池「いや俺馬鹿なんですよー」

まひる「小池君、クレヨン食べちゃうんだもん」

ツルハシ「クレヨン？」

小池「違うあれ食べられるクレヨンだったの」

ツルハシ「小池さん……クレヨンはダメだよ」

小池「違うんだって試してみただけなんですから。俺だってクレヨン食べたら駄目なことくらいわかりますよ」

ツルハシ「でも食べたんだろ？」

小池「はい」

ツルハシ「なんで食べた？」

小池「なんか、子供の頃、クレヨンって、全色そろってるだけでテンション上がったのに、

今の俺は簡単にテンション下がったりして、情けないなっておもったんですよねー」

ツルハシ「ああ……」

まひる「生の芋どうしよう」

小池「生の芋、あー、たしかに。ここなんか蒸し器とかないですよね」

まひる「たき火する？」

ツルハシ「ああ……」

男二人は面倒くさそうだ。

ツルハシ「アルミホイールなんて当然ないだろ」

小池「ないですね」

ツルハシ「よくね。……漫画の中で、芋とか出くるじゃないか……よく出てはこないか。全然よくはでてこないな。でもまあ、芋が出てきたりするだろ。そうすると、その次のシーンとかで、たき火とかしてて、そして主人公たち、焼き芋食べたりしてるだろ……俺はあれ、本当にリアリティないんだなって思ってるんだよ」

小池「え、なにどういう」

ツルハシ「俺、仕事してるじゃない……今も仕事なんだけどね本当は。焼き芋というゴールに至るためには、さまざまなプロセスが必要でさ。例えば、芋を焼くための……たき火とか、相当大変だぞ。準備や……やる場所の確保とか。そりゃ埼玉ならいいけど職場とかだと本当にたき火にはさまざまな許可がいるんだから。書類かいたりして、申請してさ。で、じゃあいざ、たき火が許可が下りたとして、まあ、部下に枯れ木とかを集めさせるよな。俺の部下、部下と言うか同志だけど、同志に伝える時に『今からたき火するから』だけじゃ、これは仕事として駄目なんだよ。目的を共有しなきゃいけないし、同志たちのメリットも俺は示さないといけないんだよ。『これより芋を焼くが、芋を焼くこととお互いの連帯感を強めて、また秋の味覚を共有するのが目的である』みたいなことをちゃんと提示してさ、コミュニケーション取って共有して……このゴールはちよっと甘いな。他の奴がこんな提案して来たら俺はきつと再考してこいって言うてしまうな……だめだなこれは。だって「連帯感を強める」って、それは焼き芋でないとできない事？ って思っちゃうんだよ……長縄跳びとかでいいじゃないかさんなもの。……でも縄跳びもだめか、障害持つてる人とかと一緒にできないもんさ。障害持つてる人と、縄跳び飛ぶことで連帯を高めるのを強要するとかそれは……差別だよな。わたしが差別じゃないって思っても会社としてそれをやる時はやっぱり考えなきゃなんだから……だからさうか、だからか。だから、ビール飲むとかかが普通になっていくのか。やっぱ。縄跳びじゃだめか。飲み会か。俺、お酒が一滴も飲めないから気持ちわかんないけど、連帯感を強めるなんて理由でたき火して焼き芋とか、なんかおかしいと思うんだよ……明確な、焼き芋でないとけない理由とかをちゃんと考えてから会社でプロジェクトチーム作って同志たちを誘うべきで、それができない以上、普通は漫画みたいに突然芋が出てきたら、たき火して、次のシーン焼き芋になつてるとか不可能な気がするんだよ。あとね、普通に焼き芋って、アルミホイールとか……専用のなにか包むものがないとね、黒焦げになるから。俺は黒のスーツ着てる人間って、地獄の業火に焼かれて真っ黒になった亡者たちに見えて仕方ないから、だからちよつとも青いスーツを着ようと毎日頑張ってるんだ。まあだから、焼き芋なんかできるわけないんだよ。だめなんだよ。社会だと。本当何をやろうとしてもダメなんだよ」

ツルハシは話をしている間に、だんだん髪の毛をむしり始めた。(長いセリフは、長いな—と思わせる分だけはなせばいい)

小池「そうか。大卒の人って焼き芋ってだけでそんなに考えなきゃいけないのか」

ツルハシ「いや俺の場合はだよ。部下っていうか同志を使う時は、プロジェクトするにあたって同志たちと俺と会社が全部ウインウインにならないとあれだから」

まひる「同志ってなに？」

ツルハシ「あ、ここ最近で会社の人の事を『同志』って呼ぼうと思ったんだよ。ほら、五億円振り込まれるじゃない。……だからさ、もう給料を中心とした関係性じゃないんだよなって思って、社長にね、『俺たちは同志ですよね』って言う事にしたの。会社ってそりゃあ給料目的だけれど、給料だけが目的じゃなかったから。だから頑張れたところもあるし、それだよ」

小池「同志ってなに？」

まひる「志が同じ人？」

小池「ああ」

そういうとまひるは突然話す気が無くなって川を見ていた。

ツルハシ「……だって、明日五億円もらえるからって、働くのをやめたら駄目だろう。何のために働いていたのか。それは、お金を稼ぐ。それも一つの目的だと思う。でもそれだけじゃないんだ、目的は一つじゃないと、わたしは思うんだ。」

まひる「だから、前に旦那にね『わざわざ埼玉の家に寝に戻ってこなくても、夜遅くなっても寝たんなら職場の近くのビジネスホテルやネットカフェで寝れば、少しは睡眠時間が増えるんじゃない』って言ったの。」

小池「うん。お芋あとで食べよ」

ツルハシ「私は寝てないんだ」

まひる「旦那はびっくりしたような顔をしていた。」

ツルハシ「俺、家、戻らなくていいのか」

まひる、いつの間にか車を降りて、ツルハシと話している。

まひる「ええ。ご飯作ったときは帰ってきてほしいけど」

小池「いいよ、お芋食べようよ。生でも」

ツルハシ「でもそしたらそれは、悪い気がする」

まひる「なんで」

ツルハシ「……家族だろ、俺ら」

小池「あーそれ、まだ、僕らが知り合う前の話？」

背後の川に、家が流されている。

まひるの受け答えが、ちよっとしっかきしている。ここは家なのかもしれない。

まひる「でも家族を維持するために睡眠時間削って体調悪くなったら本末転倒じゃない。職

場に泊まったり、ビジネスホテルとかそういうの利用したらだめなの？」

ツルハシ「お金がない」

まひる「え、もうすぐ五億円振り込まれるじゃん。二人合わせて十億円だね。」

ツルハシ「本当にもらえるかどうかわからないじゃない、それは」

まひる「今もお金はあるでしょ。使わなかった奴」

ツルハシ「学資保険か。……返って来たのか、掛け金」

間

まひる「死んじゃったし、いいじゃん」

ツルハシ「……ごめん」

まひる「あれ、なんでこんな話になっちゃったんだっけ。……あれなんだろう、なんであなた

謝ってるんだろう」

ツルハシ「俺のこういう態度がよくないんだよな……俺の……こういう、人の気持ちがよく

わからない態度だよな」

まひる「え、なんでだろう」

ツルハシ「すまん。俺はお前の気持ちをよくわからないままで。わかろうともししていない」

まひる「違う違う。なんでそんなにショック受けてる顔するの？」

ツルハシ「いや、してない」

まひる「してるじゃん」

ツルハシ「いや俺は今、なんの感情も出してない。平然としているこういう態度だよな。

まひるを傷つけるのは」

まひる「ちがうよ？ ちがくない？ あれ私今、責めてる？ え？」

ツルハシ「いや責めてないよ、責めてない。俺が悪い。もうしわけない」

まひる「だからなんで謝ってるの？ 怖いよ。それ今何に対しての謝りだからわからないか

ら、私今不安になってるのね」

ツルハシ「不安にさせて申し訳ない」

まひる「え？ え？ え？ なにー？ なんなのー？ 私に今全然伝わってないよーその

謝り。突然なんか謝られてるかんじがするよ今それ、そういうのこそやめようって話して、

話したんじゃないかったっけ。あれ？ あれ？ え？」

ツルハシ「うん。した。ただ俺は馬鹿だから何度でも同じ過ちを繰り返してしまっ」

まひる「違う違うそういう事言いたいんじゃないよそういう事言いたいんじゃないよ。そういうんじゃないよ。ね、なんだろうね、あれ？」

変な間。

まひる「今ね、なんでかわからないけど私あんたにぶたれたこと思い出しちゃったのね」

ツルハシ「……それはもう謝っただろ。結婚する前の話じゃなか」

小池「俺だったら、まひるのことをぶったりしないと思うのにな」

家から、いつの間にかまひるは、これを車の車内の助手席で、小池に向かって話している事になる。

まひる「うん。でもぶった事実でしょ？ その時にね、あんたと暮らしたらずつとこの先

ぶたれ続けんのかなーって。それってさあ、それってさあ、中学時代にさあ中学一年だった頃わたしがその時一つ上の頭の悪い先輩、中2の先輩が中学生のくせに大学生と付き合ってた、それでぶたれて、顔腫らして、腫らした顔でながら私にのろけて、バドミントン、バド部の、バド部の部室で、わたしがバドミントン部だった頃ころ、バドミントン私バドミントン私だったのね私バドミントン。バド部の部室、先輩と私とバド部二人しかない部だったから、部室で先輩と二人なのねバド、試合つうか練習ずつとその先輩と二人だけにしてバドミントン、でもバドミントン、先輩彼氏作って、彼氏の家にそうめん食べに行ったりして大学生の一人暮らしの家に、そしたらぶたれて、彼氏の家に行ってはぶたれて、それで先輩は部活で放課後私とずつとバドミントンするのね二人で、バドミントン。バド。先輩、顔痛い痛いって言いながらシャトルシュツ、シュツ、シュツって、シュツシュツシュツってするたび、先輩彼氏とか作らなかつたら絶対県大とか出たのにそいつの、麺茹でるそうめん茹でる大学生の彼氏のせいで中学生のバドミントンの県大会人生を奪ったのね。それがね、今でもずつと許せないの。顔殴る彼氏。先輩のバドミントンの夢ぶち壊して、でも恋愛だから仕方ないけど好きになるのは、でも殴るのは絶対だめじゃなか」

ツルハシ「それは、それは、それは、それは（まひるの話の区切りで何度も「それは」と言っている）、……もう謝ったはずだろ。謝ってお前が許したから、俺たちは結婚したんだろ。そうだろ？」

小池「僕だったら結婚はしないな（まひるの話の区切りで何度も言っている）」

まひる「謝ってない、たとえ謝ったとしてもそれはその時一瞬だけの事で殴った事実は絶対に残るし、私ショックで、本当にショックで、わたし殴るような男と付き合ったんだよ？」

おかしくない？ わたしおかしいよね？ バド部の先輩をずっと見てて、ずっとこうはなりたくないって固く誓って、絶対に、絶対に絶対に絶対について誓って、誓ったのに、あんたは殴った。」

ツルハシ「それはもう謝っただろう。え？ じゃあ俺はどうすればいいんだ。死ねばいいのか？」

まひる「そういわれると私はフリーズしてしまい何も考えられなくなった。皆さんには信じてもらえないかもしれないのだが、この世界に住んでいる人間はほぼ全員、死者の声を聴くことができない。死者をよみがえらすこともできなければ、死者とコミュニケーションもとることも困難だ」

小池「そうだねー、ちょっと信じてもらえないかもしれないね。さあ、ついたよ」

小池、車を降りると、そこは観光地だ。滝だ。

まひる「ここは」

ツルハシ「まひるは恋人と茨城にいったらしい」

小池「観光地だよ。川が見たいって、まひるが言うから。滝。」

まひる「(何かを読んで) ふくろだの滝」

小池「ちよっとひねらないと、観光にならないじゃん」

まひる「あー。ひねったね」

小池「でしょ」

ツルハシ「楽しかったと、まひるは言っていた」

まひる「っていうふうに、小池君その時言ってたよね」

小池「滝、楽しかったな。水、どんどん落ちてくのな。縦に」

まひる「近くに会った蕎麦屋がすごくおいしかった。ソバガキもおいしかった。値段も安く、お通し？ で出されたさしみこんにゃくも大変美味である。」

蕎麦屋になる。二人は座敷に通される。定員に刺身こんにゃくを出される。それを、反対側から現れたツルハシが聞いている。

小池「こんにゃくおいしいなあ」

まひる「と恋人は笑っていた。恋人は箸の持ち方が変わった。こんにゃくをつるんつるん落

とし、蕎麦をびしゃびしゃとたくさん溢す。」

ツルハシ「こんにゃくに、おいしいとか、まずいとか、あるのか？」

まひる「あるね」

ツルハシ「俺たち、旅行とかしなかったからなあ」

小池「俺が年収一千万円あったら、今からでもまひるに結婚を申し込むんだけどな」

まひる「と、恋人は言った。」

ツルハシ「うん」

小池、すごい箸の持ち方をしている。

まひる「私は、『箸をそういう風な持ち方をするような人とは結婚できないし、子供は死んじゃったけど旦那の事は心から愛していると思うから、一千万円あってもダメだと思っ』とその時言った。」

ツルハシ「別にいいのに」

小池「じゃあ二千万円じゃダメか？」

まひる「恋人は言う。私は笑った。『まずお箸の持ち方からはじめてみようよ。そうしたら旦那より好きになるかもしれない』」

小池「箸の持ち方はなあー。年収三千万円はどう？」

まひる「お箸の持ち方直したくないの？」

小池「うん」

まひる「どうして？」

小池「いままでずっとこれで来たから、結婚ごときで箸の持ち方直してるようじゃ、俺絶対就職できない気がするし、覚悟がぶれないために俺は箸の持ち方直さない。こんな僕でよければ結婚してほしい」

まひる「って言われた。蕎麦は美味しかった。」

ツルハシ「へえ……」

車や蕎麦屋はなくなっている。

川のほとりに、テーブルと椅子があり、まひるは座っている。

ツルハシと小池はいる。

まひる「それで、その恋人が今、私のテラス席の近くにちょっと前からいて、ぼんやりしている。明日私には五億円が振り込まれる。川を見ている。海みたいな川だ。波が寄せては返っていて、低い堤防にしぶきが上がっている。曇りだ。風も少しある。動物の匂いがちよつとする。そんなにきれいな川ではない。」

小池「本は読み終わった？」

まひる「と、恋人が聞いてくるが、曖昧な返事をした。この人の前では曖昧な私になろうとしていて。ぐにやぐにやとし、つかみどころがなく、それほど美しいとは思えない自分の外見を、心のレベルで崩して、よくわからなくなってるやろう。そうすれば、なにもしないよりはモテるかもしれない。私に形がはつきりとあるから美醜を問われるのだ。ぐにやぐにやになりたい。なので私はいま、ぐにやぐにやになっている。ふかした芋をよく、裏ご

しするじゃないですか。あれである。」

ツルハシ・小池「そうか。今日はそんなかんじなんだ」

ツルハシと小池はまひるを見る。

小池「なんかね、電車が、止まってるみたい。電車を運転する人がいないみたいで。今、給料とかそういうんじゃないかと働いている善意ある人があつまって、どうやって鉄道を動かそうか会議してるみたいよ。」

ツルハシ「(小池と重複して) 振り込み日が近づいてきてから、電車はダイヤ通り動かなくなつた。電力の供給も不安定だ。仕事から、海外の、経済がダメになつて国によく行くと、だいたい、電力がダメなんだよな。あと、飛行場に、壊れた飛行機がそのまんまになつてたりする。」

まひる「電車、動かなくなつたら、もうボードゲームショップに行けないね」

ツルハシ「ボードゲームショップ？」

まひる「うん、なんかね、ボドゲを小池君、」

小池「いや、でも頑張ってるみたい電車の人。」

ツルハシ「ああ。」

まひる「うん。小池君の話聞くの、嫌い？」

ツルハシ「いやだから、本当に鉄道好きがやってきて、お金目的じゃない人達が、やってるんだよ、鉄道、今、動かしているのは」

川の向こう側に、鉄道が走っている。

まひる「あ、電車」

小池「おお、動いてるなあ」

まひる「本当に電車動かしたい人が、今、電車動かしてんだね」

小池、手を振る。

まひる「小池君、電車に手を振ると、バカみたいだよ」

小池「知ってる？ 手を振ると時々ファアーンってやってくれるんだよ」

ツルハシ「警笛か」

警笛の音がする。

外部人がやってくる。ツルハシと小池は遠くを見たまま、まひるが外部人に気がつく。

外部人「ちょっと……」

まひる「え」

外部人「大きい音が、今……」

まひる「ああ……ああ……なんか、……なんでしたっけ」

外部人「すみませんちょっと、わたしアレなもんで。耳を頼りにつてところありますので」

まひる「ああ、なんかこう、前後不覚みたいな」

外部人「いや、目はまだ少しだけ見えるんで。でも、ちょっと……」

まひる「大丈夫です。一人で、わたし」

外部人「すみません。提供する側なのに……」

まひる「ここが、部屋なんですね」

外部人「部屋……ですね、はい。まひるさんに暮らしてもらおうとしている。」

まひる、動かない。ツルハシと小池はまひるを見る。

ツルハシ「そのときまひるは何も考えずに、川の向こう側ばかりをみつめていた。川の向こう側の、ある一点を見つめていると、目の遠近感がおかしくなって、次第に景色が変な風に見えるゾーンがある。まひるは夕暮れになり、本が読めなくなるくらい暗くなると、この目になる。」

小池「まひるさん、五億円が全世界の人に振り込まれると伝えられた日の翌日に仕事をやめて、それでも毎日、働きに行っていた時間になると外出をして、そして知らない人の家上がり込んでリビングで裸になったり絵を描いているような生活をしているうちに、自分の今の住所がよくわからなくなって。パニックになって、たまたま目の前にいた親切な異様に背の低い人……この人(外部人)に出会って。なんか、やさしくされたんだって。」

ツルハシ「というのを、小池君に話したのは、小池君に初めて出会ったときで、まひると、わたしと、その、背の低い人と、相談した結果、まひると同じ症状を持った人の共同生活場のような場所にとりあえず荷物を置くことを提案され、まひるはそこに住所を変えることになったってという話を、わたし、小池君にしたっけ？」

(ツルハシと小池のセリフは同時に言うか、交互に言うか、同じタイミングで発せられ同じタイミングで終わる)

外部人「あー、だいぶ、うるさいのがおさまりました」

まひる「よかったです」

外部人「あ、じゃあ……ここは、『誰でも、彼でも、そこにただ居てもいい家』です」

まひる「家」

外部人「誰でも、彼でも、そこにただ居てもいい家」

まひる「誰でも、彼でも、そこにただ居てもいい家」

外部人「ええ」

まひる「……(何かちょっと小さくパニック)」

外部人「あ、たぶん、……大丈夫です。あ、あの、深呼吸してください。まひるさん。大丈夫です、わたしそういうの、大丈夫です。あの、僕が今、まひるさん、あなたの名前を知っているのは、あのまひるさん視点からみたらちょっと……怖いかもしれませんが、大丈夫です」

まひる「(ツルハシに) その時やっぱり私、またパニックになっちゃって。いつものパニックのやつ。ちっちゃい奴。誰にも私がパニックになっていると分からない奴」

ツルハシ「うん」

小池「大丈夫」

ツルハシ「ああ、大丈夫じゃないけど、日常だから」

外部人「大丈夫です、わかりますから」

ツルハシ「何を根拠にそんなそんなこと言うんだろうね」

まひる「私も思った……思ったー」

小池「どうしたらいいだろ」

外部人「座りましょう。いや、座らなくてもいいです。居たいようにいてください。ここは、誰でも、彼でも、そこにただ居てもいい家なんで」

まひるは小混乱しているが、外部人が頑張ってケアしようとしている。

ツルハシ「この場所はね。みなしごやお金がない人達が集まって適当に、ただ居る家として、あるそう。でも、五億円を貰えるという事になって、そこにいる人達はどうしたらいいか、話し合っている。」

まひる「知ってる(小池に) お金がなさ過ぎて住む場所がなくなったひとが、集まって、ボドゲしたり、ネットで配信したりとか、してて」

小池「ふーん」

ツルハシ「もっと、話聞いてきた方がいいか。それともまひるが自分自身でちゃんと説明、聞きにいけるか。俺はちょっと、仕事あるから、あんまり一緒にいて行けたりしないけど」

まひる「大丈夫」

小池「大丈夫じゃないね。(ツルハシに) それでどうしたんですか」

ツルハシ「俺は仕事に行ったよ」

ツルハシ、まひるを残して去っていく。まひるはツルハシの方をつられてみる。

小池「いや……まひるさん残していくのかよ」（小池も去る）

外部人「まひるさん」

まひる「……それで今、みなさん、いらつしやるんですか」

外部人「今日ですとね、七〇人あまりですね……（この人数は上演する客席数に合わせる。）ここに、ええ七〇人。……ただ居ます。」

外部人、観客席を示す。

まひる「何してらつしやるんですか。その七〇人位は」

外部人「何もしてません。いまのところ」

まひる「……そんなこと」

外部人「見てください」

まひる、観客席を見渡す

外部人「何もしてないでしょう」

まひる「ええ……」

外部人「かなり、減ったんです。五億円、いただけるじゃないですか。……それで、もうここには居なくてもいいかなくなっていう風になって。ここにいるのが、全員です。この場所に居るのは。」

まひる「あなたもここに」

外部人「いえ、わたしは、外部の人です」

まひる「外部の人」

外部人「ここに、気がつけば、わたしいろいろね、その……世話するとうか。なんか、管理人みたいな事してるじゃないですか。そういう事すると……リーダーみたいになっちゃうじゃないですか。リーダーみたいな事、するようになったら、ここにいたら、だめですよ。」

まひる「それじゃ平等じゃないから。全員が平等に、対等に暮らすためには、財産も、権力も、等しくしないといけない。持ってる物も……」

まひる、本をバッグに詰めて、外部人のいる空間に少し移動する。荷物を床に置こうとすると、ふと、外部人が止める。

外部人「だからここに……荷物を置いたら、最後ですよ。もうあなたの荷物は、あなたの物でもなくなります」

まひる「あ……私の荷物は、もともと私の物じゃないと思うので、大丈夫です。」

外部人「あの、はい……はい？」

まひる「……実際に物を買うのはいつも旦那で、名義も全部旦那名義で、私がもし欲しいものがあつたら、まず「欲しいもの買っていい券」を発行してもらう、という……ルール？遊びを？して、それで買いに行くんです。」

外部人「ああ」

まひる「……ミシンが欲しかったら「ミシン買っていい券」をもって買いに行く、とか、そんな感じで。でも、ほら私、職場以外の外出が全然できないじゃないですか、スーパーとかモノ販売所みたいなので、だめで、あのですね、知らない他人の家とかなら逆にスイスイ入ったり、行けるんですけど、他は、もう、あのですね、パニックになっちゃうんであんまりいかないじゃないですか。だから、欲しいものがあつて、その欲しいものの券をもらったら、もうそれで物欲とか心が満足しちゃつて、実際に物を買って、物を、自分の物っていうか、そういうの、ずっとなかったんです」

外部人「あ、でも服とかは？、服とかあるでしょう。いろいろ必要な持ち物。」

まひる「それは、……服とかつてその辺に置いてありません？」

外部人「え、……ない……ですよ普通。え？」

まひる「え？ありませんか？……私よく服は、家とか知らない人の家とかに置いてあるじゃないですか。そこにいつてそれを着て、今まで着てた汚れたものは……あんまりよくないけどその場で脱ぎ捨てて、捨てるんですよ。エコによくはないなとかは思うんですけど……。だから服を変えようと思ったら、知らない人の家とかに行つて、服を捨て、その場で着て、おしまいですね」

外部人「あー。……なるほどねえ」

まひる、笑っている。外部人も笑顔。

外部人「ああ。まあ笑顔なのは、ね。元気で。ね。そんな感じで、わたし以外の人にも、え。接していければね」

まひる「ずっと笑顔で生活できれば、人生つてそれでいいのかっていう問題もありますよね」
外部人「あー、まあそうですね。生存だけが目的つてわけでもないし、じゃあ精神的にねえ、充実してればそれでいいのかっていう、そうですね。それは確かに」

まひる「はい」

外部人「そうですね」

まひる「何がですか」

外部人「うん。……そうですね。いやね。そういうのね。そういうところちよつと……チエックつていうかね。わたしだったらいんですけどね。他の人相手にそういう話とかするんだつたら、気を付けていかなきゃいけない所だと思つて」
まひる「あ、あれですよ。ね。また私、ね、そうですね」

外部人「いやいや」

まひる「違うって感じですよーねー。」

外部人「いや……いや大丈夫だから」

まひる「ははは……あー……。ね……。私がちよつと、なんていうんですかね。リミッター？
外して、ちよつとなんかこう、ね、私っぽいこと言うと、ね。すごく……。絶望みたいな顔
しますよね。わかってますから私」

外部人「そういうんじゃないですよ。いいですよ。ただ私じゃない他の人から見たら」
まひる「あーあ、って顔しましたよね、さっき」

外部人「してない。わたしはね、そういうの表情に出さないから、だからいろいろと人間関
係上手くないかなくてずっと言われてるからそれは」

まひる「あ！……あの、はい。あの、荷物わたし、あ、椅子……」

外部人「椅子？」

川のほとりにあった椅子を指さす。

まひる「椅子がうちに部屋にポツンであって、あるんですけど、あの、あの椅子、これと違
うんですけどでもここに持ってきたって事で、ここにある椅子、私の物って事にしていい
ですか？」

外部人「……あれはここの椅子ですね」

まひる「でもうちにも椅子、あるですよ。あつたんですよ。形全然違いますけど」

外部人「ええ」

まひる「椅子って……座りたい時ってあるじゃないですか。足が疲れた時とか……。家に椅
子、あるんで。あつたんで。だからあの、ここに私が椅子を持ってきたって事にして、仮
に、この椅子、私の椅子って事にしてもらって、ここに置かせてもらってもいいですか？」

外部人「……あー、ちよつと待ってください。ちよつと……すいません、ちよつと、あの、
なんていうんでしょう。……ごめんなさい。ほんとうごめんなさい。……私今あなたが何
言ってるのか全然わからなかったですマジで。……あー……。なんでだろ。なんでわか
ないんだろ。あー」

まひる「ね……。私がちよつとでも個性出すと、こうなりますよね」

外部人「いや違う、いいんですいいんです。それでいいんです私に分からないのが悪い」

まひる「ねー……。」

外部人はノートを取り出す。何か書きこんでいる。まひるはそれを見る。

外部人「あのこれはですね。ちよつと、今しゃべってもらった事、分からなくて、わたし理
系でして、図にしないとわかんないんですけど、僕わかんない事があるとずっと、図にし

て書いて理解してきたんです。」

まひる「見えるんですか？」

外部人「手を動かして、その記憶で、見えます。あの、だから、ちよつと強く、書くと、紙の上に、ボールペンの溝ができるじゃないですか。だから、それを触って……私、将来的に目が完全に見えなくなったとき、分からないことが出てきたら、どうしたらいいのかなって思いながら……ちよつと、図にして考えさせてください」

外部人はB5のノートを広げ、中心に「まひるさん」と書いた。

「天」の部分に、ノートの画像が生中継で照射され、観客と閲覧できる(のように……リアルタイムで書いてあることが分かる仕組みで、文字を書く事でこのあたりは演じられる)。この劇中、外部人はこれ以降、特に指定がなくてもノートに様々な言葉を書き込んでいく。それはセリフの一部かもしれないし、稽古の過程で出てきたワードなどを照射するとい

文字「まひるさん」↓《持ち物》↓《ここにおきたい》

そう書き、もう一度外部人はまひるのほうを見る。

まひるは「知らない人の家で手に入る衣服」を着ていた。

外部人は、ふいに、外部人の手がまひるの服に触れる。それは、まひるの体にも触れていることにもなる。

外部人「これはまひるさんですね」

まひる「私の、服です」

外部人「買ったんですか、お金を出して」

まひる「そういうのもあれば、そうじゃないものもあります。」

外部人「これは、どっちの……」

まひる「覚えてないんですよね、それが」

外部人「じゃあ、それは、もらった物じゃないですか。買った服って、覚えてませんか？わたし、覚えてるんです。この服、自分で買いました。目が見えなくなる前、視力が落ちてきた時、目の見えるうちにいろいろな事やっておかなきやと思って。お金は、目が見えなくなるというので、貰えたんです。両親から。お金を……だから今まで買えなかった、好きな服を買おうと思って。両親、お金、なかったんですけど、あって、もらって。それで、買ったんです。私が好きな服はこれですって」

文字照射

《まひるさん》↓《持ち物は特にない》↓《まひるさんの椅子はまひるさんの家にある》

まひる「素敵な服ですね」

外部人「今思えば、何でそんなことしたのか。目が見えなくなったあとでも、普通にお買い物ってできるじゃないですか。なんで、目が見えなくなる前に、買いたい物を買おうって、思ったのか」

外部人はまひるに触った後、ゆるゆると、まひるが先ほど指摘した椅子の所に移動すると、その椅子を触る。触ったのち、ノートに書き込む。

文字照射《ここにある椅子はこの家のものだが、だれのものかわからない》

まひる「あ、そうですね。そうそう、そうです」

文字照射。それはすでにノートに書き込まれている。

《まひるさんの椅子とこの家の椅子は違うものだが、用途は同じものだ》↓《まひるさんの椅子は、ここではない所にある》↓《だからとりあえず、いまここにある椅子は、まひるさんのものにしていい》

と、この末尾に、「のだろうか」の言葉を書き加えて、外部人は動きが止まった。

考えている。目を閉じる。

まひるは、目をとじている外部人を見ている。

まひる「《ものにしていい》というより、あの椅子を、私の物だ、って《思っ

かっという、そういう感じですかね」

外部人「ああー」

まひる「だめですか。思っちゃ」

外部人「いいと思います」

まひる「やった。じゃあお願いします」

ツルハシがやっと会話に入ってくる

ツルハシ「そんな風に、思わなくて、いいからな」

まひる「えっ」

外部人は川に落ちて、流されていく。

ツルハシ「私の給料で食べているとか、生活しているとか、そんな風に思っているんだった

ら、いますぐそんな考えはやめてくれ」

まひる「んーと。はい」

ツルハシ「はい、とかもやめてくれ。……それじゃあ私が、命令してるみたいじゃないか」

まひる「ああー」

ツルハシ「お互いに、自立して、生きている。それで、そういうのでもいいじゃないか。ダメなのか。経済的な自立が、今の社会では、困難なら、精神的な、自立っていうか」

まひる「わたし多分、やさしくされないと生きていけないですよ」

ツルハシ「それは、徐々に、やさしくされなくても生きていけるように、慣れていけばいいと思うんだよ。」

まひる「わたし、ツルハシさんから優しくされて、お金をもらって、生きてます」

ツルハシ「だからそういうのやめようよ。やめよう。やめようよ。それは、依存だよ。そういうのは、古い。そういうのは、すごく、良くない事だ。家長制みたいなものはもう、俺の代で終わりにしたいんだ。なんでこれが分からないのか！」

まひる「すみません」

ツルハシ「ああ……（怒らないようにしようと頑張って）……何書いてるんだよ」

まひる「えっ」

まひるは、気がつけば外部人のノートを持っていた。ツルハシはそのノートの詳細を見ている。

ツルハシ「記録を取っているのか」

まひる「……向こうの家の人ね。目が、少しずつ見えなくなってくるから、見えてるうちにいろんなことをメモしておこうって思ってたんですって。」

ツルハシ「なんのために」

まひる「わたしもね。記憶がとびとびなの。あのね、ツルハシさん聞いて。ねえ聞いて。今ね、わたしね、さっきまでね、その、新しくいく家の人と、部屋についての、話？ とうか、してた気がしたのね、わたしね、突然ね、今あなたと話しているの。唐突に。あのね、これ、あなたと、ちょっと前、何してたのか。ごめんね。なんかね、わからないの。なんで突然あなた、話したのってかんじんだけどね。ずっと……ずっとこうなのね。記憶がとびとびなの。」

ツルハシ「わかるよ。それくらいわかるよ。分からないと思うなよそれくらい。理解はしてるんだし、理解しようとはしてるよ」

まひる「だからね、一日は二四時間あるし、人は過去には遡れない。それは私たちの居る世界と同様で、この世界の人々も時間に逆行することだけは絶対にできない。」

ツルハシ「まひる」

人の形をした物が流されてくる。まひるはそれに気づく。それに向かって語りだす。

まひる「しかし、時間がとびとびになることはよくある。それは短縮されたわけでも間引かれたわけでもなく、記憶がとびとびになってるからだ。そうとしか考えられない。私は、自分で自分が少しおかしいという自覚を思っていた。ただ、他の人と同じ程度くらいのおかしさだろうとは思っていて、欠点の一つだと思ってもいる。記憶がとびとびになるのが私の欠点であり、欠点という傷口から切なくこぼれ出た個性だ、とも。」

ツルハシ「まひるの語りのどこかに重複して、また黙るんだな。お前は都合が悪くなると黙るんだな。」

まひる「だから、理解の難しい本にはノートを取る。読書しても途中で記憶がとびとびになるからだ。わからなくなったら、その都度、感じた事をノートに書く。読書していた時の私は何を感じたのか、何を思ったのか。そのノートを読むことで記憶の穴を補完している。」

ツルハシ「(重複して)俺はお前と話がしたいんだ。話し合いたいんだ。……離婚の手続きの事とかじゃないよ。手続きの話とかじゃなくて。……もっと大切な事を。お前は何を感じているのか。俺はお前が何を思っているのか。」

まひる「自分の記憶と認識の折り合いをつけ、何が現実にかけている事で、何が自分に起きた出来事なのか、毎日検証しているようにだと思った。とびとびになる記憶を、断片的なノートを頼りに、あの時私は何をしてたのか、何を思っていたのか。昨日私は何をしてたのか。今日、私は何をしてたのか。読書し、川を見ながら思い出そうとしている。だが、そのこと自体もまた、今こんなに強く思っているのに、どうせ忘れる。絶対に忘れる。」

私が私の姿をして、読書をし、何か思っている現在を、未来の私は絶対に忘れる。」
ツルハシ「俺が代わりに覚えていて。俺が仕事で忙しいときは、車持ってる恋人に覚えてもらえばいいじゃないか。彼はまひるを俺以上に大切にしてくれるじゃないか。絶対に自分で自分を忘れるとか、そんな考えだから忘れるんじゃないのか？」

まひるとツルハシのやりとりの最中、天に照射されたノートに、文字や図で、【視覚に頼らないメモ取り方法】が照射されている。

《目に頼らない記憶の遡り方法》《目に頼らない思考の補助》《もう僕はだれにも頼らない》《目で物を考えなくてもいい世界に僕は人よりも早く突入し、先に覇権を握る事が出来る》《星に視力がない以上この星で生まれた息子として、星の正当後継者は僕だ》などの文字が躍っている。

流されかけていた人の形をした物が口を開く。

人の形をした物「私が私以外の何かと交換される前、私を所有していた人は、私の事をどれ

だけ覚えているのだろう。たしかに私は数字や記号として、抽象的に私は持たされている。時たま、何かの記憶に関連付けられて、私は誰かに所有されることがある。人生で初めてもらった給料、だとか。母親が仕送りしてくれて、つかわないままでお札、とか。それらは形を変えた私だけれど、きつともうそれは、私ではなく別の何かになっていと思う。それは使われない。お守りとしてそこに居る事だろう。でも、そんな風に思われない大半の私は、交換される時、もしかしたら意識するのだろうか。そのへん、私は、私を使ったり所有し利他する立場でもないし、そもそも自意識なんて本来はないから、そもそもこういった事を思ったり、考えたりすることも、本当はないんだけど。しゃべったりすることも、本当はできないししないのだけれど」

ツルハシ「まひるに。先のセリフと重複して）黙っているなら、仕事にいくよ。今日はまひると話す日ときめていたんだ。でも黙っていたら、話にならない。そして私は、仕事を大切に思っている。仕事をしないと、まひると暮らせない。だから、私は、仕事をしなければならぬ。だけど、あと数日で、私とまひるには五億円が振り込まれる。どうしてだ。」

ツルハシ、仕事に行く。自分では仕事に行くつもりは服装なのだが、どこか壊れている。まひるは人の形をした物に食い入るように聞いているが、話が途切れると、ゆっくりと眠っていく。

ニホエヨという女が、天から吊るされてやってくる。

まひるを見ている。小池がやってきて、まひるの心音を確かめる。

小池「寝てる」

ニホエヨ「これが、まひるさん？」

小池「うん」

ニホエヨ「起こしたらまずいかな」

小池「そうだね。それに、たぶんあんまり、起きない」

ニホエヨ「なんで」

小池「疲れてるみたい。普通の人と同じがって、違う声が聞こえてきちゃうんだって。その声を聴いちやうから、疲れちゃうって」

ニホエヨ「そうか。……触ったら起きるかな……。起きるか。それは、止めようか」

小池「まひるさん。こいつ、ニホエヨ。まひるさんの次に、恋人にしようかなって思ってた人」

小池、まひるに触る。

ニホエヨ「ちょっと。寝てるんでしょ、まひるさん」

小池「うん……。手を振って見たら？」

ニホエヨ、手を振る。まひるに触ろうとするが、手が届かない。

小池「今日は、じゃあ、お話しする練習にしようか。ニホエヨが」

ニホエヨ「え」

小池「ニホエヨが、まひるさんに、お話しする練習。」

ニホエヨ「え、話すのは小池君でしょ。」

小池「え」

ニホエヨ「私はまだ、まひるさんと何のかかわりもない人じゃない。それだと話せないんだ
けど」

小池「でも、貰うんではよ。まひるさんから、二億円。かわりあるじゃん。これから。」

ニホエヨ「もらうのは小池君だよ」

小池「え、だって俺別に二億円欲しいわけじゃないよ」

ニホエヨ「いや私が、貰わないとおかしいよって言うだけだから。結果的に私が、二億
円もらうのはいいと思うけど。でも順番は、小池君がもらって、私にくれるって順番でし
よう」

小池「あー、うん。そうか。なるほどなあ」

ニホエヨ「小池君が、だから、はなしかける練習すればいいのよ。話しかけて、明日貰う五
億円のうち、二億円をくださいって、言ってほしいの。」

小池「それはさあ……。俺やっぱりどうかと思うんだよ」

ニホエヨ「どうしてー？ え……。どうしてー？ えなんでー」（じたばた）

小池「暴れないでよ」

ニホエヨ「小池君と付き合ってた時代は二人一組みたいだったんだし、今でも名目上はあな
たが恋人なんだから、半分くらいは、全財産をもらう権利があってもよくない？」

小池「ちよつとそれがもう、よくわからないんだよ」

ニホエヨ「なんでー。なんでー。なんで分からないの？ なんでー？」

小池「まひるは俺と付き合う前からちゃんと結婚してる人がいて、一時期は子供もいたんだ
よ」

ニホエヨ「それはまひるさんの都合でしょ？ まひるさんの昔のことでしょ？ 小池君が
出会う前の話でしょ？ そんなこと考える必要ある？」

小池のいる地面からモグラが顔を出す。

モグラ「ちよつと見てらんないんだよな……。おい、これはどういう事なんだ」

小池「……モグラか」

モグラ「そうさ、おいらモグラ。」

小池「モグラが、しゃべるのか」

モグラ「おうちよつと、見てらんなくてな……。なんなんだ、その、宙に浮いている女は何だ。どういうつもりだ。」

小池「なんか、ニホエヨ、まひるさんが明日もらう五億円のうち、二億円、貰えって、いうから」

モグラ「なんでだ」

小池「なんか、まひるさんと僕、恋人じゃんか。だからなんか」

モグラ「あと、どうして、そんな……。宙ぶらりんなんだ、そいつ」

小池「うんなんか、浮いてるの。気がついたらずつと」

モグラ「浮いてるってお前……。浮いてる女をお前そんな風にして、……。普通な顔してたら、それはまずいだろ。」

小池「ドラえもんって、設定上、地面から3センチ浮いてるらしいじゃん？」

モグラ「なんだ突然……。そういわれてもな」

ニホエヨ「それは私が小池君にした話だね」

小池「ああ、うん。あれ、未来からきたじゃん、ドラえもん。だから、歴史を変えないように……。ちよつとだけ宙に浮いているんだって。」

モグラ「現在に気を遣ってたんか、ドラえもんは」

ニホエヨ「だからもしね。もし、ドラえもんのその設定が生きてるなら、ドラえもんは、他の人にも触れちゃいけないって話じゃない。接触したら歴史変わっちゃうっていう縛りがあるなら。だから、ドラえもんは、厳密には、誰にも触れないのになって。道具を出すことですか、のび太君に、ぬくもりを、つたえられない」

小池「っていうんだよ」

モグラ「ああ、……。そうなのか。」

すると、水辺の水鳥たちや、小リス、擬人化した車（さつき乗っていた物に命が宿ったかのような物体）が、小池の周りに集まってくる。他にもたくさん「まごまとしたもの……。それらは日用品（食卓塩とか）である。どこかすべて、汚れている。」

小リス「小リス的にはね、ドラえもんは時として自然の法則に抗うから、許せない所あるよ」

小池「いやドラえもんはそんなことしないとと思うよっていうか、というか、おお、森に棲む

こ、小リスじゃないか。なんでタバコを吸っているんだ？」

水鳥達「人間は自分の行いをすぐ忘れるからいけませんなア」

小池「おお、川辺の水鳥達。君たちも話をしに来たのか」

車「鳥だけじゃないさ。ミーのような機械族も小池と話したがっている」

小池「わ、車じゃないか。僕が借金して買った車！ 袋田の滝に行ったときのやつー！」

食卓塩「僕は塩だよ！」

小池「塩分！ うわー小さい、食卓塩だ！」

ニホエヨ「小池君はそうやってすぐに誰とでもうちとけて話せる性格なのがすごく嫌な時があった」

小池「まってくれよー。こまったなー。そんなにたくさん話しかけられたら、困っちゃうよ。

うわー、食卓塩まで僕に話しかけてきちゃったか、まいったなー」

食卓塩「待って。順番に話すから」

水鳥達「ガアガア」

モグラ「モグモグ」

小リス「チャッピー！ チャッピー！」

小池「チャッピーってなんだよう」

ニホエヨ「順番でいったら、まひるさんの後に私は恋人になるはずだったんでしょ？」

小池「うん」

ニホエヨ「まひるさんと別れた後に、わたしと恋人になって。」

小池「そうだよ、そのつもりだったよ」

ニホエヨ「でもその前は、まひるさんと恋人だったんだよね」

小池「マイカーでさ。袋田の滝に行ったんだ。茨城の。まひるさんと。ニホエヨと知り合った直後くらいかな」

車「そうさ、小池君とまひるさんは、ミーに乗って、ドライブ旅行にいったんだ」

ニホエヨ「へえ」

小池「ああ、川が見たいっていうから、滝に……滝を見にいこうって」

ニホエヨ「あなたのやさしさはいつもちよっとだけズレてる」

小リスや水鳥、その他もろもろが車に乗る。車はそのまま川に入ろうとする。

モグラは乗り込まない。ニホエヨも無理して車に乗ろうとする。

小池「ちよっと待って、どこに行くつもりだね」

小リス「車に乗ると人と話しやすいよね」

水鳥たち「川だよ。みんなで川に行くんだ」

車「みんな、乗ったかー？ カー？」

ニホエヨ「もうちよっと待って、ちよっと、もう少し」

小池「川って」

食卓塩「僕は水にとけちゃうけど、頑張っていくよ」

小池「おーそうか川に入ったら塩は溶けるんだ。とけたらそうか、海に帰るのか」

水鳥たち「まひるさんは本当に川が好きなのに、なんで水に入らないのだろう」

モグラ「おいらも川は好きだ。だが、入ったりはしない」

小池「だって入ったら濡れるだろ」

水鳥たち「濡れるからってなんだ！」

車「小池君。ミーを、ローンを組んでまで買ってくれて、ありがとうな」

小池「ああうんあの、ローンってよくわかんないからなんかタダでお金くれるみたいなそういうのだと思ってた」

小リス「川が好きならどうしてただ見つめているだけなんだろう」

水鳥「川が好きなのに、水は好きじゃないのかな」

小池「わかんない、でもじつと見つめててきつとすごく好きなんだと思う。じつと見つめるものはすごく好きだと思う」

車「ニホさん、はやくこっちに乗って」

ニホエヨ「待って」

ニホエヨ、ようやく地面に足をつけて、車に乗り込もうとする。

塩をはじめとして、モグラ以外のこまごまとしたものは車に乗り込み、そして車は川に入っていく。

小池「待って」

ニホエヨの手を取る。

ニホエヨ「あっ」

みんな（モグラ以外）「おーい」

他の者たちはみんな川の中に入っていく。モグラは水に入らない。小リスの落としたタバコを吸っている

小池「だから、もしまひるから二億円もらおうとしたら……旦那さんと子供がいたって事をどう考えたらいいのかな、って考えちゃって。いやだって、子供がいますとかいわれて、旦那とかに比べたら恋人なんてただの他人だけ。口約束だけ。まひるとは思い出、たくさん作ったよ。でも子供ができた、とかに比べたら、恋人なんてさ」

ニホエヨ「まひるさんの子供はどうしたの？」

小池、黙っている。

ニホエヨ「それでも小池君、やっぱり二億円もらう権利がある気がする。え、だって、旦那さんは離婚しようとしてるんだから将来的に他人になるわけで、もちろん旦那さんは

二億円をもらう可能性はあるけど、五億の半分て、正確に言えば二億五千万円でしょ？五千万円分、マケてあげてるんじゃない。旦那さんのぶん遠慮したんだなって思うよ多分世の中の人。絶対小池君、もらえるよ、二億」

小池「なんで付き合ったら、お金が半分もらえるとニホエヨは思っているんだろう。」
モグラ「さあね」

ニホエヨ「小池君の発想は損してるよ。もっと貪欲に生きないと。それに、その二億円は自分の為に使うんじゃないくて新しい恋人と、……新しい生活するためにつかうんだからいいじゃん」

小池、ニホエヨが川に入ろうとするのを止めようと、手を取る。

小池「俺の五億円だけじゃだめなの？」

ニホエヨは、触ったことをなかったことにしようと、触られた部分。例えば手だったら、手袋を脱ぎ捨てる

ニホエヨ「ちがう。だめじゃない全然足りるむしろ余るしどうにかしてほしい使い道とか」

小池「じゃあなんで二億円」

ニホエヨ「それは小池君が損してるからだよ。小池君は一時でもまひるさんの彼氏だったんだから、堂々と貰えばいいんだよ。損してる人を私間近で見たくないんだけど」

小池「……いいよ。俺そんなお金いいよ。使いきれないし。……いいよお前に、俺の五億円あげるっていうか……一緒に使おう？ 五億円」

ニホエヨ「やだ使いたくない。っていうか、無理だし」

小池「そうか。」

ニホエヨ「使ったらなくなるようなもの使いたくない。つかったら私のせいでお金、消えちゃうじゃん」

小池「そりゃお金なんだからそうなんじゃない」

ニホエヨ「私絶対嫌なの。ここにあったものが私のせいで消えるのはダメなの。ごめんね最後が終わった後までわがままで。こんなことじゃ小池君に嫌われちゃうね。」

小池「嫌わないよ、ずっと嫌わない。わかった二億円もらえるかどうか、まひるに話だけしにいくよ。って、それで今日、ここに来たんだけど」

ニホエヨ、入水する。手袋だけが残っている。

モグラ「……何年も前になるけれどな。この街に、国家予算が下りて、ここ周辺は親水公園として整備された。土手は、サイクリングロードになってな。道は、中古のピアノや金管

楽器を破棄するときに出る廃棄物が原料で作られたリサイクルレンガで舗装された。そのせいか、夜な夜なこの道では、音楽が霊になって、川ッぺりにシヨパンやドボルザークが揺蕩うらしい」

小池「モグラのくせに博学だな」

モグラ「ああ、ただレンガのせいで、おいら地上にできることはできなくなつてな。まあ、地中で生まれて、地中でくたばるのがモグラだ。ああやって、皆と一緒に川に行くことは、そもそもできなかったって話した」

小池「ふーん。そうか。……そうか。」

まひる、目を覚ます。小池はモグラと話していて気がつかない。川の向こうに、車たちはたどり着いたらしく、手を振っている。

小池「モグラも振り込み口座作ったの？」

モグラ「いんや。おいらモグラだからさ。モグラが、口座作りに銀行行ったらさすがに……」

小池「まあな。モグラは銀行の受付では……門前払い食らうよな」

モグラ「口座作る以前にいろいろやる事あるだろっていわれそうだよな」

小池「ああ……。あ、あいつら手を振ってる。食卓塩なんか、なあ、水の中に入ったら溶けちゃうだろうに。あー、なんとか形保ってんな。ビンか。ビンの中に塩が入ってるから、水に溶けなかったんだな。なるほどなー」

モグラ「人間には五億円振り込まれるけど、モグラには五億円振り込まれないんだよな」

小池「あー。まあねー」

モグラ「まあ、振り込まれない者たちもいるってこつた。小リスや、車や、塩もそうだ。」

小池「ニホエヨにはね、振り込まれないんだ、お金」

モグラ「あーそう」

小池「振り込まれる日まで、生きていないと、だってそれは、彼らと同じだからさ」

まひる「小池くんどうしたの」

小池「ん、いや今、モグラと話した」

まひる「ああ……。いんの？ モグラ、そこに」

小池「え、いやわかんないけど」

まひる「は？」

小池「あー、そうか」

モグラは地面の中に潜っている。

何をしたらいいかわからない間。そこに、ツルハシがやってきて、毛布を持ってくるが、まひるが起きている事に気がつき、その毛布をどうしたらいいかわからない。

小池「あ、かけたたら、いいんじゃないですか」

ツルハシ「あ、これをか」

まひる「え、毛布？」

小池「あの、まひるさん、寝てるから、毛布をかけにきたわけでしょう？」

ツルハシ「……そうかなあ」

まひる「あ、別にもう、起きたから、いらないよ。っていうか、そうか、私、寝てたのか」

ツルハシ「私は会社に行かなくてはいけなくて、だから行ってたわけだから、だから、毛布
なんか、こんなところに持ってくるはずないんだけどね」

まひる「そっか。……寝た方がいい？」

ツルハシ「ここですか？」

まひる「毛布、あるし」

ツルハシ「寝るなら家にしなさい」

まひる「どっちの家？ もうないほうの家？ それとも、誰でも、彼でも、そこにただ居て、
いい方の家？」

ツルハシ「それは、君が決めなさい」

まひる「ツルハシさん。また命令口調になってる」

ツルハシ「あっ」

まひる「傷つくのツルハシさんだよ。また……「命令してしまった」って（「ウワーっ」と
頭を抱える）、……みたいに」

ツルハシ「うん……すまない」

まひる「ほうら……また、謝った」

ツルハシ「すまん」

小池「あーなんか、毛布、使わないなら、僕、返してきましようか」

間。

小池「小池ですけど」

ツルハシ「あ……まひるの、恋人の」

小池「そうっす」

ツルハシ「あ、ツルハシです。」

まひる「この時初めて、ツルハシさんと小池君は出会ったんだなって、思い出してた」

間。モグラがこの様子を見ている。

小池「あ、モグラ。これはモグラです」

モグラ「俺のことはいいから」

まひる「わたしがあなたに殴られたあとに、あなたは小池君に出会ったのね」

ツルハシ「あ、名刺、名刺……ああ、ちよつとあの、あ、ちよつと今……だめだな、紙しかないな。これは、あ、レシートか」

小池「あー、レシートって、あ、名刺入れにも入れてるんですか」

ツルハシ「それがいれちゃうんだよ。ダメなんだよ、ずぼらで。本当は私ね、全然サラリーマン向かない。」

まひる「小池君はわたしに別に優しくしないのね。誰にでも優しいのね」

ツルハシ「っていう風に聞いててね。君のこと……」

小池「あ、そうなんですか」

ツルハシ「私もぜひ見習いたいと……あと、まひるに優しくしてくれてありがとう」

小池「あ、はい。いやあの、そうですね、旦那さんみたいに殴ったりはしてないから、たぶん優しくしてはいるんだと思うんですけど」

ツルハシ「あ、ツルハシです」

小池「あ、ツルハシさん、っていう苗字。へえ」

モグラ「意図しない優しさって、優しさじゃないんじゃないか」

小池「あー、そうなのかな」

ツルハシ「ん？」

小池「すみません、なんか、モグラが」

モグラ「あ、別にそんな仲良しってわけじゃないので」

ツルハシ「モグラとしゃべってんのか……」

小池「なんか、聞いたら、モグラも五億円もらえないって話してて」

間

まひる「小池君は動物や植物にナチュラルに話しかけるし、電柱やあと空気とか壁とか、あと概念にも話しかけるんだよ」

ツルハシ「って言うってたけど本当だったんだなあ」

小池「あのとりあえず、毛布、元のところに戻してきましようか」

ツルハシ「ああ、それはあれだ……交換しちゃったんだよ。」

小池「え、お金か何かと？」

ツルハシ「なんていうか……人柄と」

小池「人柄」

ツルハシ「……あの、干してあってさ。そのの、角の、民家に、毛布。で、そこで、そのの人に、すみませんって頭を下げて。……明日五億円、振り込まれるだろう？ そんな感じじゃさあ、もうお金なんて価値、ないからさ、売り物なんて、どこにもないからさ。毛布が欲しかったら、持つてる人に頭下げるしかないだろう」

会社員の服を着ている透明人間に囲まれるツルハシ。合計15人くらいいるが、入れ代わり立ち代わりしている。

ツルハシは正座させられる。服は各々自由な感じで、アロハもいる。自由な会社の服。

透明1「それで頭を下げるつもりなんですか」

ツルハシ「何度も頭下げて、すみません、妻が、別れる予定なんですけど、そこで、妻が寝てて、毛布を……必要だと思うので、それを頂けませんか、と」

透明2「会社を抜け出して、そんなことをしてたんですか。ツルハシさんは」

ツルハシ「お金、私ね、財布の中に、レシートしかない。財布にね、ティッシュ入れてんだよ。ははは。だからね、もうお支払いするとかじゃないんだよ。お金、限界までもってな
くて」

透明2「はい」

透明3（アロハ）「でも確かに財布の中にティッシュ入れてもしつくりくるような気がしますね、たしかに」

ツルハシ「ね？ お金って、お札って、紙じゃないじゃないか。だから……こういうの、お願いするのって。毛布を、貸してください。妻のために……って。お金じゃない。……だから、精いっぱい、誠意を、見せて。お願いして。そしたらその人、『あなたは人柄がいい』って。それで、『時間くらいしたかな。〇時間くらいしたかな……人柄がいいからって言って、毛布を借りる事が出来た」

透明4「人柄を支払った、と」

ツルハシ「何度も頭下げてさ……それで〇時間ぐらい、お札に草むしり、やったよ。こういう事だと思うんだよ。結局、仕事って」

透明5「でも、もう人柄は払ったわけでしょう？」

ツルハシ「……ん？」

透明6「人柄がいいって言って、毛布もらったんだから、もう人柄払ったから、いいじゃないですか。草むしりしなくても」

ツルハシ「いや、もらったわけじゃないから。毛布は借りただけだから」

透明7「さつきからなんでなんか、偉そうな口調なんですか」

透明12「今会社の勤務時間中じゃないですか」

透明3「その毛布、その民家の人に返したら、ツルハシさんの払った人柄と、草むしりは返ってくるんですか？」

ツルハシ「……えっ」

ツルハシの会社になる。

透明8 「そう言う事じゃないですか」

ツルハシ 「そういうことって何が」

透明9 「僕たち、もうお金じゃ働かないじゃないですか」

ツルハシ 「そうだよ……。あのさ、正座、もう辞めていいかな」

透明3 「それは、……。嫌です。正座しててください」

ツルハシ 「そうか」

透明3 「僕たちにも、人柄を支払ってほしいんですよ。……お給料とか、もういいんで」

ツルハシ 「そうだよな。五億円、明日になったら手に入るんだもんな」

透明10 「ええ」

透明11 「まず認めてください。ツルハシさんは独善的で、他人の意見を聞かず、自分が正しいと思っている事しか耳を貸しません。ツルハシさんには感情がないです。心がないです。まずその事を自覚してください」

透明13 「……（無言ですごく嫌な事をする）」

ツルハシ 「……小さな会議室だった。トイレにも行かせてもらえず、私は七時間、部下の訴えを受け続けた。部下は一五人いたので、一五人はローテーションを組んでちゃんと休憩しつつ私に話しかけていたが、わたしには、どういうわけかは休む時間が与えられない。それを不公平だと私は言ったんだが、」

透明14 「またあなたは自分の事が正しいと思って、自分が被害者だとすら思っている。罰として休憩時間はゼロです。いいです。正座辞めてください。そのかわり、そこに片足で立っててください」

ツルハシ、片足で立つ。スーツたちはツルハシにバケツを持たせ、首から【私は独善的
人の言う事を聞かない】というプレートを下げられる。

小池 「……何してるんですか」

ツルハシ 「反省だよ。それ以来、会社に居る時、わたしはね。ずっと反省してるんだ。

小池（読む）【私は独善的で人の言う事を聞かない】……」

ツルハシ「うん。私は自分の事をそう思うようになった。だから、気を付けて接しないといけない。だが、具体的にどうしたらいいかわからない。明日には、五億円が全世界の人々に振り込まれる。そんなさなかだった。部下の大半が振り込まれたら退職すると言い出した。わたしは、そんな理由で退職はおかしいと思う。会社というのは、たしかに給与目的で働いているけれど、それだけじゃないだろう。もっと前向きな気持ちもあるはずだろ。」

小池「俺、正社員になった事ないんで」

ふらつくツルハシ。透明人間たちは、バケツにパチンコ玉とか、使わなくなったパソコンのモニターだとか、オフィスにギリギリあるようなないような、微妙に重そうなものをど

んどん入れていく。

またさまざまな事が書かれたプレートをツルハシに下げていく。

【私は仕事のためにバランスの良い生活を放棄することを他人に強要する】

【私にはふとんを干す権利を社員たちに認めていない】

【私は他人と話す時頭の中に台本を用意していて一言一句間違えないようにしゃべろうとしている】

【私は部下の人達を人間だとは思っていない】

ツルハシ「私は信じてるんだよ。会社につとめた事で自分はまひると結婚する自信もついたり、今離婚について協議しているのも、会社で自分が仕事を上手くいかないのが原因だと思う。自分が独善的で、他人の意見を聴かないから、こうなるのだ。」

ツルハシの格好は、冒頭で流されてきた「人の形をした物」にだんだん似てくる。

ツルハシはその後縛られ、まさに人の形をした物とそっくりいろいろなものが付けたされる。

ツルハシ「まず会社の部下たちを「同志」と呼ぶことから初めてみたらどうか、と提案した。

五億円を振り込まれてしまうなら、給与を中心とした人間関係ではなく、志を中心とした人間関係になれば、今まで通り仕事ができるのではないか。わたしが皆を「同志」と呼び始めてから数日。一五人いた部下はほとんどが辞めて、今や三人になってしまった。

その残った三人と言うのも、「犬」、「マメ」、「モチ」という、もともと人間ではなく、退社の意思を示すことができないメンツだったので、今私には部下が実質ゼロ人だ。もともと部下たちの不満として「犬はまだ生き物だからわかるけど、マメとかモチとか、無機物を部下としてカウントするのは本当に間違っている」というのもあった。だが、わたしとしては犬も豆もモチも大切な部下として、助けられたり、不審な人物に吠え掛かってもらって防犯になっているとも思って仲間として信頼している。」

まひる「……疲れたらさあ。家に帰ってこなくていいんだよ」

ツルハシ「だが、こうして残った三つメンツとデスクを並べても、彼らは何の仕事もできなかった。無能を信頼していたのか、と私は感じざるを得なかった。」

セリフの通り、透明人間たちは去り、スーツを着せられた犬、餅、豆がその場に取り残される。

ツルハシ「本当に苦しいと思った。五億円を貰える世界は、生きていくだけで五億円を取られていた世界と同じくらい、辛いのではないか。私は寝ていない。マメと、モチと、イヌが働かない分、わたしが頑張らなくてはならない。投資の営業の仕事だ……。わが社は、

35名のエンゼル投資家グループを抱えるベンチャーキャピタルの仲介のあっせん業だ。御社に投資をしたいと考える投資家に、エンゼル投資家を、マッチングする。そうした業務を、してだね。」

まひる「(ツルハシと重複して) そんなにつらくて、眠る時間がないなら、会社に泊まったり、ビジネスホテルとか使うといいと思う。すこしでも寝る時間があった方がいいと思う」

だが、犬は、分からない顔をしている。モチと豆に至っては無反応だ。

ツルハシは縛り付けられた格好のまま、つらい体制で業務のミーティングを行う。

犬「ワン」

ツルハシ「……つまりね、ベンチャーキャピタルっていうのは、お金が欲しい人のところに、お金をあげたい人を紹介し、お金をあげる。その際、手数料として、お金が欲しい人から、お金を貰うんだよ。……それで、お金をあげたい人のケアもするんだ。そして最終的に、お金をあげたい投資家の方々に、お金が沢山もらえるように……手配するんだ。何をやっているのか、分かるか？」

犬「ワン」

ツルハシ「ワン、じゃだめだ。ワンなんて答えたらだめだ。それは、先方に失礼に当たるから……。ちゃんと説明できるか？ 誤解しないようにね、投資をしませんか、ではなく、投資を受けませんか？ という風にね。」

犬「そうですか」

ツルハシ「そうなんだよ」

犬「犬の俺には難しく感じます。そもそも、お金が欲しい人から、お金を貰うっていうのは……なんですか？ その時点で、何をやっているのかも分からないと思う」

ツルハシ「いや、よく考えたら変だが、……よく考えなかったら、大丈夫だと思うよ」

犬「僕、よく考えるタイプだからさあ」

ツルハシ「……俺は今、犬としゃべってるのか」

犬「そうみたいですね……。ちょっと苦しそうですけど。大丈夫ですか？」

犬、ツルハシをいろいろ助けてやる。

ツルハシに毛布をかぶせる。モチとママも心配そうにドリンクをあげる。

ここは会社じゃないのかもしれない。

ツルハシ「……」

犬「知ってるの通り、犬には五億円は振り込まれないじゃないですか。」

ツルハシ「ああ」

犬「これって、犬には仏性が無い、っていう事なのかなって思うんです。仏性があるのは人

間だけだから、五億円は振り込まれる」

ツルハシ「それは……なんだい」

犬「仏教の、公案っていう……修行になぞなぞみたいなの出すんですよ。なぞなぞに、座禅くみながら一生兼命考える。犬は、仏さまっぽい何かはあるのか、悟れるのか、というなぞなぞです」

ツルハシ「ないのか？ 仏性っていうのは」

犬「無、らしいです。模範解答」

ツルハシ「無……。何してんの？」

犬「あ、お湯、沸かそうかなって。ツルハシさん、あれですぬ奥さんと別れてから、ずっと同じ服を着てますね」

変なタイミングでモチからドリンクを貰ったり、タオルで顔を拭かれたりしている。

犬はどこからかガスコンロか何かを持ってきて、お湯を沸かしている。

会社ではなくてサバイバル生活のようだ

ツルハシ「家に帰ってないから」

犬「ああ。」

ツルハシ「服は、家にしかないだろ……。そりゃあ、人前で裸になるわけにはいかないからな。社会が、全裸になっていっていうゴーサインでも出さない限り、そりゃ、脱がないよ」

犬「服を脱いでもいい社会に、変えていくしかないですよね」

ツルハシ「ここは、……会社か。」

犬「元、会社です。」

ツルハシ「……」

犬「ちよっと、鍋とかヤカンとかなかったんで、すみません。お湯沸かせたら、川の水とかでも飲めると思うんで」

犬、缶の廃材を器用に使い、お湯を沸かしている。被災地のサバイバル術のようだ。

モチは手伝う。豆は何もできず、おろおろしている。モチは豆をやや邪険に扱う。

犬「五億円、全員に配られるわけですから。投資会社は軒並み、つぶれました。誰のせいでもないです」

ツルハシ「君には配られないんだろ」

犬「仏性がないんですよ、俺。犬なんで」

ツルハシ「動物だからと言って……そんなさあ」

犬「ペットにね、口座を作る人が現れて。ペットも家族の一員だからって。それで口座を作

る人がいて、それでは際限がないからって。人に限るって決めたみたいです。犬や、ペットはダメっていう」

ツルハシ「……このままでいいのか。」

犬「だから、この間私ら、シンポジウム開いたんですよ。このままでいいのかっていう。ロフトプラスワンで。」

ツルハシ「ロフトプラスワン？」

犬「イベント会場の。学生時代からそういうのやって……『仏性ないけど五億円もらってOK？ もらう派・もらわない派。二手に分かれて激論ブツダトークナイト』って、そういう感じで（スマホをみせて当日の写真見せたり）。……若手のお坊さんを中心に、サブカル漫画家とか、あと私のような犬や猫、鶏や、あとですね、竜や鬼といった架空の生き物たちもイベントに参加して。ゲストに杉作J太郎が居ました。J太郎は、貰うって、五億円。絶対貰うって、J先生」

ツルハシ「そういうのちよっとわかんないけど、サブカルは、嫁が好きなんだけどなー」

犬「J太郎さんは、五億円もらって、人を幸せにしたって言っていましたよ」

ツルハシ「そうか……お腹空いたな」

犬「僕もです」

ツルハシ「でも、働いてないしな……働いてないから、ご飯食べる資格、ないよな。家に帰る資格もないよ……。何もないよ……。無だよ。」

犬「身体、よこにすると、お腹のすきが和らぐらしいですよ」

ツルハシ「ふーん……ちよっとやってみるかな」

ツルハシ、火の前で横になる。

間

ツルハシ「ああでも、少し、やわらいだな。和らいだ気がする。……ああ……オフィスでこんな風にしちや、だめだよな……もうオフィスでもないか。なんだここは。」

犬「……俺、どこかで飯でももらってきましようか」

ツルハシ「我々働いてないんだし、お金もないんだし。もらえないだろ」

犬「だから、人柄ですよ。毛布の時みたいに。……人柄で、いい人柄使って、持つてる人から貰いにいきます」

ツルハシ「犬でしょ、君」

犬「ワン」

ツルハシ「……いいよ。伝わらないよ。君の人柄。犬柄か？ ……それにね、人柄なんて売って、ご飯なんか食べちゃダメだよ。……エジソンはそんなことしなかったと思うなあ。

子供の頃伝記ばかり読んでね。トーマス・アルバ・エジソン少年は、子供のころから、お母さんを質問攻めにして、困らすんだ……どうして、歴史の上に言葉が生まれたの？

とかね。」

犬「わかんないですね」

ツルハシ「お母さんこまるだろうなあ……お腹空いたなあ。お腹空いた。」

すると、何もできなくて自責の念にかられていた豆が突然思った、ガスコンロの火の中に自らの体をつっこむ。

驚く一同。

火は消える。一瞬暗転。

明転すると、犬と餅と豆は居ない。小池とまひるの三人がただ居る。

小池「豆焼くと、パチーンてなりますよね」

ツルハシ「なったな、パチーンて。顔面に。ほらやけど跡」

小池「うわー……はっはっはうわー」

ツルハシ「それで、焼いた豆を食べて、そのあと、おもちも食べた。焼いて。」

小池「犬はどうしたんですか」

ツルハシ「……」

小池「そつすよねー」

ツルハシ「そっかー。君が、そうか、まひるの恋人かー」

小池「なんか、ちゃんと挨拶するのはじめてですよね」

ツルハシ「うん。てか、まだ、ちゃんと挨拶してもらってないよね。普通、ちゃんとした挨拶ってやるよね。一瞬くらい真面目になつてさあ」

間

ツルハシ「真面目にしてさあ、真面目に働いた方がいいよ、って、いままで何度も言ってきたんだけどなあ。人生において。でもさあ、言えなくなつたんだよねえ」

小池「僕、今まで何度も言われましたよ。働いてないのに車買ったりしてたから」

ツルハシ「ああ」

小池「今さっき、川の中に沈んだんですけどね」

ツルハシ「おおん」

小池「なんか、お金借りるって、貰う、みたいな感じだったから。返すとかがわかんなくて。だって使うから借りるっていうか、貰うから、当然ないわけで、それを、返せっていうのは、変ですよね」

ツルハシ「……まあねー」

小池「まひるさんに逢う時、車だったらいいなあって思ってた。借金して買ったんですよ。な

んか担保とか手数料とか利子とかあるって聞いたから、僕ちゃんと受付の人に、「俺は利子を返せるような人間じゃないですよ」って説明したのに、貸してくれてさあ……」

ツルハシ「仕事だからね、その受付の人もね」

小池「でも俺、コミュニケーション能力が低いんですかねー。けっこう、恫喝に近い感じで、利子を含めたお金返せって言われて。そのころ、毎日金借りて暮らしてたし、普通に考えて返せないじゃないですか。で、僕なりに何度も、お金はないって伝えたんですけど、全然伝わらないんですよ。コミュ障なんすかね、僕」

ツルハシ「でもモグラと話せるんだろ」

小池「はい。小リスとか、あと塩とも話せましたね。何時間でも話せると思うんですけど」

ツルハシ「すごいよ」

小池「ツルハシさんだって犬とかモチとか会話できるじゃないですか」

ツルハシ「いや俺のは精神の病だから、だめ。全っ然」

小池「じゃあ、まひるさんと一緒じゃないですか。ダブル精神ダメな感じじゃないですか。」

ツルハシ「一緒じゃないよ」

小池「家族って感じじゃないですか」

ツルハシ「家族じゃないよ」

小池「そうなんですか」

ツルハシ「帰ってこなくていいみたいだったから、だからそれは、家族じゃないでしょ」

小池「俺家族とか分からなかったからなあ」

川の向こうで、ニホエヨがただ居る。こちらを見ている。

あいかわらず向こうでも宙に浮いている

小池、それに気づき、手を振る。ツルハシ、見てる。

小池「あれ、あそこで浮いているの、家族になるかもしれない奴です」

ツルハシ「……浮いてる奴か」

小池「ニホエヨっていうんですけど。向こう側に居るのか」

小池、ふらふらと川に入っていくそうになる。ツルハシがトンと肩を叩いて止める。

小池「寝てるところを、ガムテープで縛られて、家中のものにタンを吐かれたこともあって。借金返せみたいな。僕そん時、「そうか、ここで暴れて家の物を壊したらますます修理費でお金がかかるから僕はお金を返せなくなる。だからこの人は、タンを吐くことによって、物の価値を減らさないまま俺を脅して、嫌な気持ちにさせてお金を返そうという気を起こさせているのか」って思ったんです。賢いなあって。」

小池、止まらない。ツルハシ、身体で止める。二人は相撲のような感じになる。

ツルハシ「明日になれば、お金は振り込まれるだろう。それで返せばいいじゃないか」
小池「でも二ホエヨはもらえないんですって。なんでだかわかりますか？」

ツルハシ「わかるよ」

小池「おかしくないですか。そういうのおかしくないですか。なんでももらえるのともらえないの、二手に分かれるんですか」

ツルハシ「このお金が、どこから振り込まれるかわかるか」

小池「え」

ツルハシ「だれが俺たちに金をくれるか。この金が誰のものだったのかわかるか」

小池「考えたこともなかったです」

ツルハシ「向こう側の人達だよ。」

小池「あー」

ツルハシ「世界の半分が死に絶えて、その死に絶えた人々の財産が、わたし達に平等に配分されてるんだ」

小池「……」

ツルハシ「働かないで五億円、貰うんだよ、私たちは、もらう側なんだよ。振り込まれるの。」

小池「……」

相撲の結果、ツルハシが小池に馬乗りになっている。

ふと我に戻り、ツルハシが立ち上がる。小池、腕を痛めたのか、腕痛いのポーズをしている。

まひる「小池君をなぐったの？ ツルハシさん」

ツルハシ「いや……。……相撲だよ？」

まひる「あー寝てたから、目をつぶってたから、見てないんだ」

ツルハシ「そうか」

小池「五億円がもらえる日が近づいてさあ。車の維持費と駐車代と、家賃、払える日が近づいてさあ。やっと、ちゃんと、車にのれると思ったんだよね」

まひる「うん」

小池「ガソリン買占めというか、ガソリン売り渋りっていうのかなああいうの。そのせいで、もう、車動かせなくて。徒歩っすよ。……徒歩の場合は川沿いの道を歩くんすよ。都内からこの街まで、川が流れている。川の流れをさかのぼるようにして、まひるさんの家まで。川のほとりにある家まで。俺、都内住みで、埼玉の方まで、上がってくるじゃないですか。川。川が、どんどんおっきくなるんすよね。おっきくなって、そこは気がつくとか、埼玉なんですよ。川の幅、すげえ大きくなって。東京の川が、いかに細かくなってたか、なんか思い知るんすよ」

ツルハシ、目をつぶっているまひるをずっと見ている。

小池「東京から、歩いてここまで来たんだよ」

間

小池「五億円もらえる世界になって、車乗れなくなって、僕は歩くようになったんだよ」

間

小池「車に乗れなくなったのはすごく残念だし悲しいけど、僕はこれから歩くことにするよ」

間

小池「みたいなことを話そうと思っていたのに、あと、ニホエヨから言われた、二億円もらうって話、しなかったのに。事前に準備した言葉はいつも言えないで、そのままになるのは、なんでだろうね。沢山まひるさんに話したのに、何にも話せないで、気がつくともグラとか、木とか、草とか、そういうのに話しかけちゃうの、何でだろうね」

ツルハシ「私が聞いているよ」

小池「ああ」

ツルハシ「聞いているよ。まひるに、あとで伝えておくよ」

小池「ああ……」

夜になっている。

ツルハシ「もうそろそろだと思っただけど、こないな」

小池「誰か待ってたんですか」

ツルハシ「施設の人がね。準備ができ次第呼びますって言ってたんだけどね……。こないんだよ」

小池「家は？」

ツルハシ「別々に住んだ。これから、わたしとまひるは。別居だよ」

眠るまひるを、旦那のツルハシが支える。小池も支えようとしたが、やめた。

ツルハシが体を器用に動かして、まひるを背負う。

小池「あ、どこか行きますか」

ツルハシ「うんだから、そこにね。連れていこうとおもってね」

小池「あー……車があればなあ」

ツルハシ「こんな夜まで小池さん……小池くん、あれだよ、明日は……もう数時間後か、五億円振り込まれる日なのに。」

小池「それなんですけど、あの、まひるも五億円もらうって言ってました？」

ツルハシ「うん。」

小池「あー……。」

ツルハシ「どうかしたの」

小池「いや、あの言いにくい事をちょっとまひるに言おうかなって思ってた」

ツルハシ「そうか。別に言わない方がいいよ、一生そういうのは」

と言いながら、二人はそのまま、どこにも行かない。

お互いに何か去りがたい感じになっている。やがて、ツルハシが歩き出す。

小池もついて来る。歩きながらの二人。

小池「ツルハシさんも五億円もらうんですね」

ツルハシ「あー、なんかね」

小池「もらわないんですか」

ツルハシ「口座、あるでしょ。口座。……私、作らなかった」

小池「えー……えー……！ あ、作らない人なんているんですね」

ツルハシ「うん、なんか」

小池『働かざる者、食うべからず派』なんですか」

ツルハシ「違う違うそんな立派じゃないよ。なんか、口座つくるのが面倒でさあ」

小池「わかります。俺もまひるの次に付き合う予定の恋人に作ってもらいましたもん」

ツルハシ「ね。なんかさあ、みんなが五億円もらうって話しててさあ……同志たちが、お金がもらえるからって本当に会社辞めて……なんだろうね。俺は歯向かいたかったのかなあ」

小池「何にですか」

ツルハシ「五億円もらったら、五億円のこと考えなきゃいけないじゃない。使い道とかさいろいろ。俺はそれよりも、仕事したかったからさあ。今、一番したい仕事あってさ……あのさ、動画の生配信とかあるじゃない。あれ簡単にできるようになったじゃん。スマホかパソコンがあれば。あれを利用して、もつと何かこう……できないかなあってなんかね。商品のPRだけじゃなくてさあ、ラーメンおいしいよ、おすすめだよみたいな動画ばかり再生回数多くて……そういうんじゃないじゃんきつと、生配信が一人一人できるって。

お金あげますとかそういう仕事じゃない他の仕事とかもっと」

小池「ああいいじゃないですか」

ツルハシ「でも五億円振り込まれちゃうからさあ……。いままでの企画書が全然。もうさ。そもそもお金増やしたい……違うな、少なくとも、損しない前提が企画じゃない、仕事って。」

小池「俺はバイトしかしてないからわかんないですけど。」

先のツルハシの長いセリフの最中、モグラが顔を出していた。

モグラ「モグモグ」

ツルハシ「あー、ええとね、仕事って、二番目に大事な事は損をしない事だから」

小池「一番はなんですか」

ツルハシ「仕事しない事」

小池「あー」

モグラ「モグモグ」

小池「ん？」

ツルハシ「でも俺はさ、まひると結婚したから、子供も生まれたから、仕事しないとイケなかったから。損しちやイケない、しかも皆が、というようなこと考えてたらさ……五億円が振り込まれるようになったからさ」

モグラ「モグモグ」

小池「(モグラに) ちょっと黙ってるよ」

ツルハシ「でも、それ、未来だろうって。今すぐ振り込まれるんだったらまだよかった。なまじ時間あったでしょ。お金を振り込む準備する時間だから仕方ないけど、……未来にお金がある、みたいな状態が、しばらくあって、俺はだめだったな。俺はだめだった。耐えられなかった。こわれちゃったよ。五億円が、未来にあって、皆何もしなくても五億円儲かって。」

モグラ「(ツルハシの言葉の端々になにか口になっている) モグモグ」

小池「おいモグラ黙ってる」

ツルハシ「未来に五億円ある世界なんて、数か月前は想像もしていなかった。俺たちは、ローンとか、日本の国債とか、未来というのはいっただって借金とか、何かをむしり取られるような、地獄が前提で生きてきたんだよ。俺、腰が抜けてしまったんだよ。なんか。未来が地獄だから、地獄に負けない様に、頑張って、這ってさ、なにくそって、生きて行けたの。もうね、何をもがいても、全員が五億円もらえるんだよ。逆に、何をしたら、もがいたって、損することができない。たった数日くらいで五億円分を損することって、なんだろうな。俺たち程度の能力だと、誰かを殺すか死ぬくらいしかできないじゃないか」

モグラ「モグモグ」

小池の足元にいたモグラが、小池の足元を引っ張り、手招いている。

モグラはさっきからのすぐく楽しそうな雰囲気を出している(ベイブレードとか、楽しい感じの遊びをいつの間にか集まった子モグラたちと楽しんでいる)し、口笛も吹いているし、手にはなんだか振ったら面白い感じになりそうな棒も持っていて、とにかくいろいろくすぐる感じ。

小池は耐えた。でも、だめだった。

モグラは手にしていた棒を口につけると、楽しそうな音を棒から出した。棒は笛だったのだ。楽しい感じの音楽が流れると、もう小池の注意はそっちへ行ってしまった。

長いセリフは続いているさなか、小池はモグラに勧められるがまま、そのまま足元の穴に潜っていき、モグラに案内されると、そこはもう、モグラの世界だった。

小池はモグラの世界にきてしまった。(モグラの穴から何か風景が照射されていて、奥の海に見える川が見え方が異なっている)

以下、ツルハシの長いセリフの最中に同時に展開する。

小池「おいモグラ、ここはどこだ」

モグラ「へい、ここはモグラの夢の世界。モグラランドだよ」

小池「ははあ。あの中央のお城はなんだ」

モグラ「シンデレラ城だよ」

小池「へえ」

モグラ「シンデレラ城の中のお昼ご飯はうなぎだよ」

小池「モグラのくせにうなぎなんか食べるのか、こいつ」

モグラはずっとにやにや笑って楽しそうにしている。

小池も、楽しい空気は分かるんだが、今一つ楽しめてない。

だがやりとりのさなか、小モグラたちによって小池は少しづつ、茶色いタイツを履いたり、手と鼻をドリルにしたりして、モグラになっていく

小池「おいモグラ。モグラランドになんで僕を連れてきた」

モグラ「君がモグラの世界に行きたがってたからだよ」

小池「うーんたしかに僕はもう鼻も手もドリルにってしまったしな。ちよつとノリノリだったのは否めない」

モグラ「だろ？ でもお前が死んでも人間の世界は生き続ける。これは科学的に証明されている」

小池「モグラのくせに科学とはなまいきなやつらだ」

モグラ「そもそも、小池が死んだら、お前だけの死じゃなくて、例えばお前、セックスの時
精液を出すだろ？ 精液一グラムに大体、五億匹くらいいるんだぞ。それらが小池一人の
死によって、全員死ぬことになる。お前からは死の匂いがした。クレヨンを食べたらしい
じゃないか。おまえそれは、死にたがってたからじゃないか？ 凶星だろう。クレヨン食
べ自殺を考えていたんだろう。モグラの直感はよく当たるんだ。だったらそれよりも、夢
の国・モグラランドに招待して、面白おかしい生活を一生し続ければいいさ」

小池「俺、セックスのたんびに、五億人殺していたのか」

ニホエヨが、モグラの天敵・フクロウになって空から吊るされてやってくる。

ニホエヨ「子供は欲しいって言ったけど、今すぐじゃないよ」

モグラ「ひゃー、フクロウだ！！ モグラの、天敵だあ！」（逃げる）

小池「ニホエヨ！」

ニホエヨ「今すぐじゃない。子どもが欲しいのは。でも、もう少ししたら五億円がもらえる
し、あなたの五億円と、まひるさんからもらう二億円の、七億円あれば、どんな馬鹿でも
ちゃんと子供育てられると思う。だからね、私たちが馬鹿だったんなら、馬鹿じゃない人
二人をを三億円で雇って、お父さんにお母さんしてもらえばいいって。三億あれば、お
父さんやお母さんをやってもいいという人が、この世界のどこかにいるかもしれない。」

小池「僕たちはどうするのさ。雇ったら」

ニホエヨ「それを、見てみましょうよ。で、余った一億円をさ……使わないままにしてさ。安
心しましょう。一億円あるんだなって。うちには一億円ある。こんな安心することある？
もう何も不安な事ないよ。働かなくてもいいし、プライドなんてないアピールもしなくて
済む。そしたら、小池君はもうすこし、私に優しくできる気がする」

空へ去っていく

小池「待って！ ニホエヨ、飛んでいくな！ 俺はモグラだ！ 空は飛べない！ でもそう
か、ここはモグラの国、モグラランドか。つまり、空とは大地の事か。モグラは、大地を、
潜るように掘るようにすれば、飛ぶことができる。まってるよ、いますぐ上に行くから
な！」

小池、上昇し、空を掘る。

モグラランドの光が消えていき、地中の闇になる。暗転。

気が付くと小池は穴に半分埋まっている

小池「出る穴を間違えた……?」

そこには誰もいなかった。この穴は、川のこちらがわではなく、あちら側だ。あちら側の世界。つまりここは、私たちのいる世界なのだが、生きている者はほとんどいない。小リス、車、水鳥達、塩が転がっている。モチ、マメ、犬たちも死んでいる。

まひる「子供ほしいんだ、小池君」

小池「(ええ)」

川の向こう側からまひるの声。

小池は、生きている感じを出さなのまま、念じる事で返事とする。(SEとするか、何か声とは違う方法で返事をする)

まひる「なんか、そんな話してたじゃん。さっき」

小池「ああ……」

まひる「私、いいよ。お母さん、やるよ。別に三億円もいらぬ。だって、五億振り込まれるから」

小池「その話なんだけどさ。一億円……なんとか俺がもらう事はできないかな」

まひる「私子ども育てるの、得意な気がする。本の読み聞かせとか、きつと好きだし。……今読んでる本ね、不破哲三のね、『資本論全三巻を読む』っていう本。読み聞かせ、するよー。不破哲三。子供に」

小池「(そうか)」

まひる「いいよ。旦那とも相談するよ。大丈夫。私たちには五億円ある。大丈夫。今度こそ大丈夫。きつときつと。だって五億円あるんだもん、今度こそ、私たちは、幸せになれる。なれるって。」

小池「(そうか)」

川の向こう側とこちら側が反転する。

もしくは、もともと先の一連のやりとりは、舞台奥の川の向こう側で行われていた。

こちら側では、ツルハシがまひるを担ぎ終わり、例の椅子におろして、座らせている。

ツルハシは、一つだけ手にしていた芋に視線をやる。

ツルハシ「まひるに向かって」小池君あのさ……小池君がここにいないのは知っている。

いつの間にかいなくなっていたけどね、今、まひるの見てる夢の中にはいるんだろう。だからまひるに声をかけている。……小池君さ」

まひる「(小池になりかわり) ……はい」

ツルハシ「芋……あの生の」

まひる「はい」

ツルハシ「あれ、俺、いや」

まひる「あ、……そうですね。でも電子レンジで簡単にふかす方法もあるんですよ。あんまりおいしくない気がしますけど」

ツルハシ「あ、そうなの」

小池を再現するため、座りながら寝たまま、小池のフリをして立ち振る舞っている。

まひる「そうですねですよ。電子レンジ用の容器に、ちょっと水をいれてそれで」

ツルハシ「あ、俺あれだ電子レンジ用の容器使うって時点でもう駄目だわ」

まひる「ああー」

ツルハシ「それ専用の容器が必要な家電って、家電として失格な気がするんだ」

まひる「ああー」

ツルハシは、もう相手は誰でもいいと思いつつ話しかける。

ツルハシ「……仕事する人間も同じだよ。それ専用、みたいな作業ばかりを要求するようなプロジェクトを企画立案する時点で、それとだけ予算と人材潤沢に使う気だよっていう……いやもう、五億円振り込まれるからもうねこの嘆きもね。全部消えちゃうんだよね。悩んでいた事とか……ね。別にね」

まひる「そうですね」

ツルハシ「なんで新しい恋人作った？ ニホエヨだっけ。浮いてる」

まひる「はい。死んじゃったんですけどね。恋人になる前に」

ツルハシ「まひるがいるでしょ」

まひる「そうなんすよね。いるんだけどね」

ツルハシ「まひるじゃだめなの」

まひる「……わかんない」

ツルハシ「ああ……じゃあさ。じゃあさ。俺がもしさ、まひるから、小池の事を殴れって言われてたとしたらよ」

小池「はい」

ツルハシ「殴っていいのかな」

まひる「それはちよつとダメですよー。暴力は。なんで殴るんですか。殴る事で解決にな

るんですか」

ツルハシ「だろ？（何が「だろ」なのかはわからない） だよなあ……」

まひる「はい……」

ツルハシ「五億円振り込まれることとき、新しい恋人の事とかさ、君の生き方はさ。全然関係ないんだなあ」

まひる「あー」

ツルハシ「……殴っていいかな。いいだろ。まひるもさ。普通に恋人作ってさ。たぶん、俺はいつでも殴っていいんだろなって思いながら毎日暮らしてた。もう恋人がいる事、隠すことも諦めてたよな。まひるに恋人がいること。離婚協議中だから、別に恋人作ってもいいとは思ったけど、でも、俺が働いている時にデートするのは、ちょっと考えてほしかったな。生活するためにさ。安心するためにさ。安心してほしいからまひるに、俺は働いてたわけ。その間に君は……君らは……袋田の滝とか行くわけだろ。ソバガキ食ったのかあ……俺は働いてるのにさあ……。でもなあ、もう五億円が振り込まれるんだから……。そうだよなあ。俺が働く意味、全くないよなあ。……俺は、どうしたらよかったのか。どうすればいいのか。どうしていけないのか。」

ツルハシはなんとなくまひるの手を握る。

まひる、触られて、目が覚める。

まひる「ねえ。……光ってる」

ツルハシ「ん？」

遠くの、海のように見える川の向こうで、また何かが光る。

爆発らしい。向こう側で、つまりこちら側の、私たちの世界で、また人が死ぬ。

私たちの世界の人が持っていた財産は手放される。向こう側の世界、つまりまひるたちの世界に財産は吸い込まれる。

人の形をした物、が、また流れてくる。それらはいままで登場してきたまひるとツルハシ以外の人物たちが、固まっているようにも見える。

人の形をした物「わたしは自分の体を金に変えるか、水に変えるか、悩んでいた。いずれにせよ五億円と言う大きなわたしが動くので、わたしも慎重になっていて。わたしの体が一度物質になると、もう二度と元の精神的な概念で戻れないので、どっちにしようか慎重に見極めていきます。わたしは自分の体を呈して、五億円の金額の振り込みの根拠と担保になるうとしていきます。振込金額に信用を与えるため、わたしは「わたしが姿を変えた金」か、

「わたしが姿を変えた水」のどちらかになります。あなた方は具体的な形を伴った人間なので、概念を物質にする必要があるのです。そうすれば、あなたがたが「水」か「金」を信用する限り、振り込まれた富の信用は落ちない。そしてわたしは、自分の体を物質にしたら、その姿を見られない様、煙か土か誰かの食べ物になって、その姿をさらすことはいないでしょう。わたしが消えてしまう際には、わたし自らの体との交換を保証する誓紙を発行することを約束します。水か金か、まだわかりません。迷っています。水と金、どちらが信用されるでしょうか。いずれにせよ、その誓紙が私の水か金の代わりとして、わたしとあなたたちの契約として——『わたしたちはいつでも、その紙をもっていれば、わたしの体を物質化した金か水と交換できます』——ということとなるでしょう。明日、口座残高を確認していただきたいのです。預金通帳に記された数字分、あなた方は私のかつて体だった、金か水と交換できます。もう二度とそれに眼に触れることはできませんし、触れることも感じることもできません。あなたが、あなた方はわたしの体を物質化したものを、所有することを、許しますし、ぜひ使ってほしいです。それらはかつて別世界の人々が蓄え、そしてその死によって解放されたわたし達です。どうぞ、五億円です。受け取ってください」

この長いセリフは、歌のように、そしてモグランドのパレードのように、きらびやかな演出のさなか行われる。その光と影に紛れて、ツルハシは人知れず去っていく。

まひるは、椅子に座ったまま、取り残される。

光が収束し、もとの室内の明かりに戻る。

そこには、川も何も無い、素の舞台のような、がらんとした空間に、椅子だけがある。

そこで目が覚めるまひる。

手を、頬にやる。じゃっかん、赤い。殴られた跡のようだ。

温かい。

まひるはそこに手をやりつづける。しばらく、間。

と、まひるは自分の目を触れる。自分の目を疑っている。周囲が、あまり見えなくなってきたらしい。外部人と同じ症状なのか。

ふらふらと、椅子から立ち上がる。頼りなく歩いている。はじめて目が見えなくなったかのような、不穏な動き。

一度椅子から立ち上がると、さっきまで座っていた椅子に戻るのには困難だ。

光がまひるにだけ集中していつ、周囲が真っ暗になる。

よろけるまひる。

何者かが、よろけたまひるを支える。その瞬間だけ、光が瞬いたようになる。

何者かは、ツルハシなのか、小池なのかわからない。二人なのかもしれない。

まひるは、ちよっとびっくりしたような顔をするが、それも一瞬である。暗くなるからだ。
暗転。

(了)

作 山本健介

演劇計画口「戯曲創作」[S/F]—到来しない未来」（主催：京都芸術センター）

委嘱戯曲 第二稿（2018.09.01）



この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示・継承の国際 ライセンスの下に提供されています。
本稿の上演・二次創作・改変・再配布について、許諾申請等は必要ありませんが、事業と戯曲創作の参考の
ため、京都芸術センター（e-mail: info@kac.or.jp）まで「連絡」を報いただければ幸いです。

※なお、平成30年度下旬に発表予定の決定稿については、著作者に断りのない使用・改変・再配布を禁ず
るかたちでの発表を予定しています。